

東九州自動車道（都農～西都間）関連 埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ

平成17年度



2006

宮崎県埋蔵文化財センター

東九州自動車道(都農～西都間)関連
埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ

平成17年度

2006

宮崎県埋蔵文化財センター

序

本書は、日本道路公団九州支社（現西日本高速道路株式会社九州支社）の委託により、宮崎県教育委員会が実施しております東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財発掘調査の概要報告書です。

当該区間の発掘調査は、平成 11 年度から継続して実施しており、本書では平成 17 年度に実施した 19 遺跡における本調査及び確認調査の調査概要を収録しています。

今年度は、川南町内に展開する尾鈴山東麓の台地上に立地する遺跡から都農町内の名貫川左岸に展開する台地上に発掘調査の中心が移ったことが大きな特徴といえるでしょう。

なかでも都農町内の遺跡では、主に旧石器時代の遺構・遺物が多数確認されました。これまで、都農町内では当該時期の表採資料は知られていましたが、今回初めて発掘調査によって資料が得られました。

このように、どの遺跡も遺跡が所在する地域の歴史を解明するために重要な情報を雄弁に語りかけると認識しており、調査時から現地説明会や調査報告会等で状況を広く地域住民に公開するよう努めております。

ここに報告する内容が、学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査に当たって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 18 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長 宮 園 淳 一

例 言

- 1 本書は、平成 17 年度に実施した東九州自動車道（都農～西都間）建設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県教育委員会が日本道路公団九州支社（現西日本高速道路株式会社九州支社）から委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本書の遺跡位置図（第 1 図）は、国土地理院発行の 1/50,000 の図をもとに、それを縮小して作成した。
- 4 本書に記載された遺跡の調査内容・成果は、平成 17 年 12 月末現在で把握しているものであり、今後の調査・検討の結果、変更する点が生じる可能性がある。
- 5 本書で用いた標高は海拔絶対高である。方位は基本的に座標北（G. N.）である。
- 6 本書の執筆は、各調査員が分担して担当した。なお、執筆者名を文末に示した。
- 7 本書に使用した実測図等の浄書及び掲載した写真の撮影は各遺跡の調査担当者がおこなった。
- 8 本書で使用する遺構の略号は以下のとおりである。

SA	竪穴住居跡	SI	礫群・集石遺構	SP	炉穴
SX	石組遺構	SZ	不明遺構		
- 9 本書の編集は今塩屋毅行、岡田 諭、大野義人、井上美奈子及び金丸琴路が担当した。
- 10 調査の記録類、各遺跡の出土遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。



名貫川以北の地形（朝倉遺跡・朝草原遺跡・尾立第3遺跡・立野第5遺跡）



旧石器時代調査(礫群) (朝倉遺跡)



旧石器時代調査(石器製作跡) (朝倉遺跡)



縄文時代早期調査(散礫と集石遺構) (国光原遺跡)



縄文時代早期調査(炉穴群) (国光原遺跡)



弥生時代～古墳時代遺構群全景〔尾花A遺跡（一次）拡張区〕



弥生時代竪穴住居跡近景〔尾花A遺跡（一次）拡張区〕

目 次

巻頭図版 1 : 名貫川以北の地形 (朝倉遺跡・朝草原遺跡・尾立第 3 遺跡・立野第 5 遺跡)

巻頭図版 2 : 上段 旧石器時代調査 (礫群) (朝倉遺跡)

下段 旧石器時代調査 (石器製作跡) (朝倉遺跡)

巻頭図版 3 : 上段 縄文時代早期調査 (散礫と集石遺構) (国光原遺跡)

下段 縄文時代早期調査 (炉穴群) (国光原遺跡)

巻頭図版 4 : 上段 弥生時代～古墳時代遺構群全景 [尾花 A 遺跡 (一次) 拡張区]

下段 弥生時代竪穴住居跡近景 [尾花 A 遺跡 (一次) 拡張区]

第 I 章	はじめに	1	
第 1 節	発掘調査の経緯	1	
第 2 節	調査組織	2	
第 3 節	基本層序	8	
第 4 節	遺跡の立地と環境	9	
第 5 節	整理作業	11	
第 6 節	現地説明会等	12	
第 II 章	確認調査の結果	13	
上ノ原・北分遺跡	13	立野第 1 遺跡	14
第 III 章	本調査の結果	16	
朝倉遺跡	16	朝草原遺跡	19
尾立第 3 遺跡	21	立野第 5 遺跡	22
立野第 2 遺跡	23	八幡第 2 遺跡	24
登り口第 1 遺跡	25	登り口第 2 遺跡	26
市納上第 2 遺跡	27	中ノ迫第 2 遺跡	28
中ノ迫第 3 遺跡	30	前ノ田村上第 2 遺跡	31
国光原遺跡	33	尾花 A 遺跡 (一・二次)	35
南中原第 1 遺跡	39	勘大寺遺跡 (二次)	40
尾小原遺跡 (三次)	41		
第 IV 章	まとめにかえて	42	
第 1 節	旧石器時代	42	
第 2 節	縄文時代	43	
第 3 節	弥生時代	44	
第 4 節	古墳時代	45	
第 5 節	古代以降	45	
第 6 節	フローテーション	46	

図目次

第1図	東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡の位置	3	第16図	調査区と周辺地形(市納上第2遺跡)	27
第2図	名貫川から平田川に至る地形断面図	9	第17図	調査区と周辺地形(中ノ迫第2遺跡)	28
第3図	段丘面別遺跡分布	10	第18図	集石遺構分布図(中ノ迫第2遺跡)	29
第4図	トレンチ配置図と周辺地形(立野第1遺跡)	13	第19図	調査区と周辺地形(中ノ迫第3遺跡)	30
第5図	トレンチ配置図と周辺地形(上ノ原・北分遺跡)	14	第20図	調査区と周辺地形(前ノ田村上第2遺跡)	31
第6図	立野第1遺跡、上ノ原・北分遺跡出土遺物	15	第21図	遺構分布図(前ノ田村上第2遺跡)	32
第7図	調査区と周辺地形(朝倉遺跡)	16	第22図	SA2出土器(前ノ田村上第2遺跡)	32
第8図	AT上位遺構分布区(朝倉遺跡)	18	第23図	調査区と周辺地形(国光原遺跡)	33
第9図	調査区と周辺地形(朝草原遺跡)	19	第24図	縄文時代遺構分布図(国光原遺跡)	34
第10図	調査区と周辺地形(尾立第3遺跡)	21	第25図	調査区と周辺地形(尾花A遺跡)	35
第11図	調査区と周辺地形(立野第5・第2遺跡)	22	第26図	尾花A遺跡(一次調査)遺構分布図	37
第12図	遺構分布図(立野第2遺跡)	23	第27図	尾花A遺跡(二次調査)遺構分布図	37
第13図	調査区と周辺地形(八幡第2遺跡)	24	第28図	調査区と周辺地形(南中原第1遺跡)	39
第14図	調査区と周辺地形(登り口第1遺跡)	25	第29図	調査区と周辺地形(勘大寺遺跡(二次))	40
第15図	調査区と周辺地形(登り口第2遺跡)	26	第30図	調査区と周辺地形(尾小原遺跡(三次))	41

表目次

表1	東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡一覧	4	表8	立野第1遺跡、上ノ原・北分遺跡出土石器計測表	15
表2	東九州自動車道都農町域基本層序 (新富・高鍋町域、川南町域との対応関係)	8	表9	朝倉遺跡基本土層	18
表3	整理作業及び報告書刊行を実施した遺跡	11	表10	基本層序(朝草原遺跡)	20
表4	現地説明会等実施状況	12	表11	基本層序(前ノ田村上第2遺跡)	31
表5	基本層序(立野第1遺跡)	13	表12	フローテーション対象試料の一覧	47
表6	基本層序(上ノ原・北分遺跡)	14	表13	種実等の圧痕のある土器の一覧	47
表7	立野第1遺跡出土土器観察表	15	表14	後期旧石器時代～縄文時代早期相当層における 各遺跡の出土状況(平成17年度調査分)	48

写真目次

写真1	前ノ田村上第2遺跡調査指導	1	写真11	礫群と石器(IVa層)(前ノ田村上第2遺跡)	32
写真2	中ノ迫第2遺跡調査指導	1	写真12	SA1炭化材出土状況(前ノ田村上第2遺跡)	32
写真3	確認調査風景(上ノ原・北分遺跡)	1	写真13	炉穴(SP1)完掘状況(国光原遺跡)	34
写真4	現地説明会(八幡第2遺跡)	12	写真14	集石遺構検出状況(一次調査)(尾花A遺跡)	36
写真5	SZ1半截状況(南西より)(朝倉遺跡)	17	写真15	土器出土状況(一次調査)(尾花A遺跡)	36
写真6	SX1半截状況(西より)(朝倉遺跡)	17	写真16	遺構群完掘状況(一次調査)(尾花A遺跡)	36
写真7	ML1上部(V層)の無文土器出土状況(朝草原遺跡)	20	写真17	石組遺構検出状況(一次調査)(尾花A遺跡)	36
写真8	MB0(IV層)の無文土器出土状況(朝草原遺跡)	20	写真18	竪穴住居跡完掘状況(一次調査)(尾花A遺跡)	37
写真9	SI8(中ノ迫第2遺跡)	29	写真19	集石遺構検出状況(二次調査)(尾花A遺跡)	38
写真10	SI12と散礫(中ノ迫第2遺跡)	29	写真20	竪穴住居跡完掘状況(二次調査)(尾花A遺跡)	38
			写真21	種実等の圧痕のある土器	47

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査の経緯と概要

東九州自動車道は、北九州を起点とし福岡、大分、宮崎、鹿児島 4 県の東海岸部を南北に走る約 436km が予定され、宮崎県では延岡～清武間が平成元年に基本計画が決定された。西都～清武間については平成 7 年度から発掘調査が始まり、平成 13 年度にすべての遺跡の報告書刊行が終了した。道路については平成 12 年 3 月 25 日に清武 JCT～宮崎西 IC、平成 13 年 3 月 31 日に宮崎西 IC～西都 IC までの供用が開始された。

また、門川～西都間 59km は、平成 8 年 12 月国土開発幹線自動車道建設審議会において整備計画区間に決定した。そのうち都農～西都間約 25km について、同年 12 月に建設大臣（現国土交通大臣）より日本道路公団へ施行命令が発令された。

一方、県教育委員会では、平成 6 年度に延岡～西都間の分布調査を実施し、整備区間決定後の平成 10 年度には都農～西都間の路線上を対象とした詳細な分布調査を行い、79 遺跡 896,000 m²の埋蔵文化財包蔵地の所在を確認した。そして平成 11 年度から日本道路公団九州支社と宮崎県教育委員会との間で委託契約を締結し、宮崎県埋蔵文化財センターが用地買収の進捗に合わせ確認調査・本調査および整理作業を実施している。調査は、平成 11 年度の 3 遺跡の確認調査で始まり、平成 17 年度末までに 70 遺跡、約 861,000 m²の調査終了を予定している。また門川～日向間 14km についても、平成 17 年 8 月の分蔵遺跡の確認調査に始まり、板平遺跡の本調査も行われている。6 月・11 月には調整会議も開催された。

なお、日本道路公団は分割民営化され、17 年 10 月 1 日から西日本高速道路株式会社九州支社宮崎工事事務所・延岡工事事務所となった。

平成 17 年度の調査は、確認調査 8 遺跡、本調査 18 遺跡で実施した。確認調査については、調査対象区の 10%を目途に遺跡の範囲・性格・文化層の状況などを把握するために行っているが、土取りなどに



写真1 前ノ田村上第2遺跡調査指導
(柳沢・泉・本田委員、清野調査官)



写真2 中ノ迫第2遺跡調査指導
(田崎・小畑・広瀬委員)



写真3 確認調査風景(上ノ原・北分遺跡)

より本調査の必要のない遺跡については、確認調査結果を本概報に掲載している。

本調査は新富町が終了し、北部の川南町・都農町の遺跡が主体である。調査内容についても新富町・高鍋町では後期旧石器時代や縄文時代早期が主体であったのに対し、川南町・都農町ではその2時期に加えて尾花A遺跡などのように古墳時代前期の集落跡も調査している。尾花A遺跡では古墳時代前期を中心として竪穴住居跡が100軒以上も検出されている大規模な集落跡であるが、弥生時代中期～終末期の竪穴住居跡も10軒ほど検出された。一方、川南町登り口第2遺跡、中ノ迫第2遺跡、前ノ田村上第2遺跡などでは弥生時代後期後半～古墳時代前期の竪穴住居跡が数軒検出されており好対照な在り方を示している。また、都農町の朝倉遺跡では始良Tn火山灰の上位・下位で礫群が60基も検出され、ナイフ形石器や角錐状石器などの石器群の変遷を迫える良好な遺跡である。このような状況のなか調査指導委員の先生方からは、「都農町では東九州自動車道分類のML1の上部・下部と草創期土器・細石刃核の関係を発掘調査で明らかにしていくように」「遺構検出をはじめ遺構掘削・遺物取り上げなど調査方法に関する助言」などの指導を受けた。ほか注目すべき遺跡として、川南町前ノ田村上第2遺跡では、縄文時代草創期の隆帯文土器が出土し、新富町勘大寺遺跡（二次調査）でAT下位からも石器や礫群が検出され、川南町国光原遺跡では草創期・早期の集石遺構59基・炉穴41基も検出されている。

整理作業は、発掘調査が終了に近づき、報告書作成のための遺物実測・浄書が増加したため、旧石器の実測・製図については業務委託し報告書作成の早期刊行を目指している。また、遺構内の土壌の水洗作業も継続して行っている。報告書は19遺跡について刊行し、高鍋町老瀬坂上遺跡は町の遺跡詳細分布調査で同じ遺跡名があるため老瀬坂上第3遺跡と変更した。

普及活動として新富町の調査が終了したので調査成果を一般の方々にいち早く公開するため遺跡報告会等の開催や児童・生徒の体験発掘等も実施した。

(文責 長津宗重)

第2節 調査組織

調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	宮園 淳一
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課長	宮越 尊
主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第一課長	高山 富雄
主幹兼調査第一係長	長津 宗重
主幹兼調査第二係長	菅付 和樹

調査第一係

大山博志	山田洋一郎	小川太志	竹田享志
安藤正純	小山 博	興相慶一	藤木 聡
松本 茂	松元一浩	重留康宏	立神勇志
大野義人	森本征明	渡辺美幸	岸田裕一
堀口悟史	佐竹智光	金丸琴路	

調査第二係

永田和久	安藤利光	長友久昭	河野康男
藤本典昭	白地 浩	島木良浩	向江修一
松林豊樹	今塩屋毅行	堀田孝博	嶋田史子
三品典生	岡田 諭	福田 聡	天野玄普
井上美奈子	淵ノ上隆介	日高優子	

調査員（嘱託）

河野雅人	福田光宏	土谷崇夫	田中達也
小船井順	石津晴菜	児玉 幹	

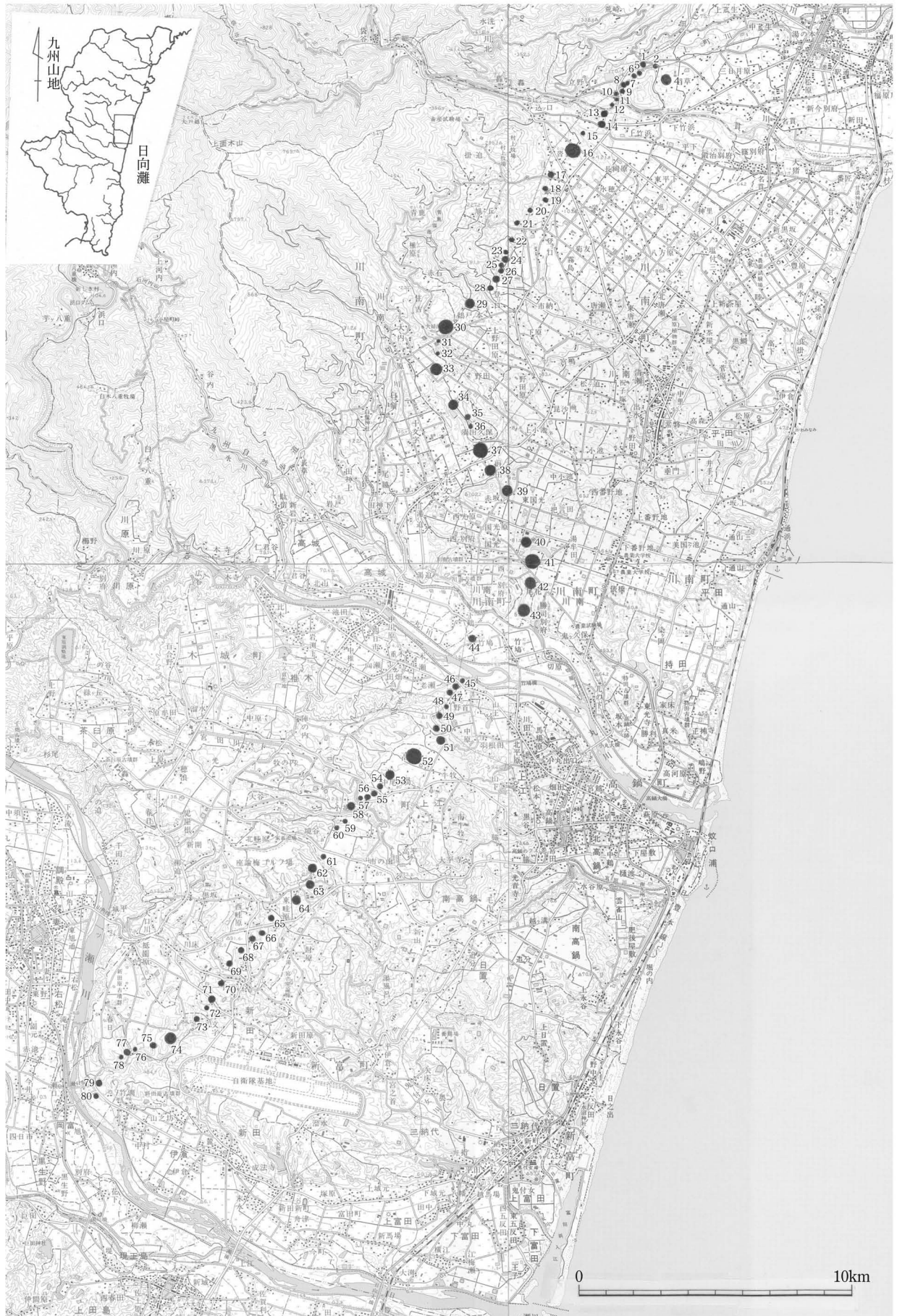
東九州自動車道発掘調査指導委員（五十音順）

泉 拓良（京都大学）	小畑弘己（熊本大学）
田崎博之（愛媛大学）	
広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）	
本田道輝（鹿児島大学）	柳沢一男（宮崎大学）

調査指導・協力等（五十音順）

有馬義人（新富町教育委員会）
大塚昌彦（渋川市教育委員会）
岡村道雄・高妻洋成（奈良文化財研究所）
島岡 武（川南町教育委員会）
清野孝之（文化庁）
山本 格（高鍋町教育委員会）
吉永真也（都農町教育委員会）

(文責 長津宗重)



第1図 東九州自動車道(都農～西都間) 関連遺跡の位置

表1 東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡一覧 1

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積(m ²)	調査面積(m ²)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考	
都農町	1	朝倉	都農町大字川北字湯牟田	20,500	800	16	確認	旧石器, 縄文[早]	17.2.14~17.3.18	17年度調査終了予定	
					1,089	17			17.6.9~17.11.4		
					4,200	17			17.6.9~		
	2	尾立第2	" "	1,100	100	16	確認	旧石器, 縄文[早]	17.2.14~17.3.10	17年度調査終了予定	
					1,000	17			17.6.9~		
	4	朝草原	" 字朝草原	12,600	900	16	確認	旧石器, 縄文[早]	17.2.14~17.3.17		
					235	17			17.6.1~17.7.27		
					4,430				本掘		17.9.1~17.12.22
	5	尾立第3	" 字尾立	3,000	160	17	確認	旧石器	17.6.1~17.7.27		
					1,000				本掘		17.9.1~17.10.26
	6	尾立第4	" 字湯牟田	12,800	250	16	確認		17.2.14~17.3.10		
	7	尾立第5	" "	2,700							
都農町	8	立野第5	" 字竜ヶ平	13,500	1,380	17	確認	旧石器, 縄文[早]	17.6.1~17.8.5		
					2,500				本掘		17.9.1~17.12.27
	9	立野第1	" "	5,200	230	17	確認	旧石器, 縄文[早]	17.6.1~17.8.1		
					246				確認		17.9.1~17.9.28
	10	立野第2	" "	400	24	17	確認	旧石器, 縄文[早]	17.6.1~17.8.1		
					188				本掘		17.9.1~17.10.31
	11	立野第3	" "	3,650	200	15	確認	-	15.11.17~15.12.9		
	12	立野第4	" "	3,150	80	15	確認	-	15.11.17~15.12.9		
川南町	13	八幡第1	川南町大字川南字宮田上	2,750	220	15	確認		15.11.17~15.12.9		
	14	八幡第2	" 字八幡山	15,490	1,650	15	確認	縄文[早], 弥生	15.11.13~16.2.20		
					2,490	16	本掘		16.12.1~17.3.31		
					2,500	17			17.4.1~17.7.1		
	15	上ノ原・北分	" "	3,470	217	17	確認	縄文[早]	17.7.1~17.7.25		
	16	銀座第1	" 字前田	38,600	788	14	確認	中世・近世	14.5.2~14.5.29	報告書刊行 一部未調査	
					856						14.10.21~14.11.6
					2,012				本掘(一次)		14.7.8~14.10.31
			2,140		14	本掘(二次)	14.11.1~15.3.31				
			4,044				本掘(三次)		15.4.3~15.5.29		
			800				確認		14.12.10~15.3.5		
	" 字沓袋畑	3,000	15	本掘(四次)	15.5.7~15.5.28						
		1,890			確認	15.8.19~16.2.20					
	17	銀座第2	" 字黒岩	7,500	441	14	確認	旧石器, 縄文[早], 近世	14.5.2~14.5.30	報告書刊行	
	7,059	本掘	14.7.8~15.3.28								
	18	銀座第3A	" 字明野	1,300	100	14	確認	旧石器, 縄文[早]	14.5.2~14.5.7	報告書刊行	
	300	本掘	14.6.17~14.7.31								
	19	銀座第3B	" "	300	10	14	確認	-	14.5.2~14.5.7		
20	登り口第1	" 字宮田	2,000	280	16	確認	旧石器, 縄文[早]	17.2.14~17.3.25			
				1,130				17		本掘	17.7.1~17.9.2
				350				16		確認	縄文[早], 古墳, 中世
3,800	17	本掘	17.7.14~17.9.2								
21	登り口第2	" 字宮田・山ノ口	8,120								
22	山ノ口	" "	4,650								
23	谷ノ口	" "	200								
24	市納上第1	" 字市納上	8,300	1,500	15	確認	旧石器, 縄文[早], 弥生, 中世	15.11.10~16.1.16	報告書刊行		
				500						16.2.20~16.3.31	
5,200	16	本掘	16.4.1~16.10.12								
25	市納上第2	" 字松尾谷	2,630	300	16	確認	旧石器, 縄文[早・後], 弥生	16.5.24~16.7.14			
				2,190				17		本掘	17.7.1~17.12.26
26	市納上第3	" "	3,550	40	16	確認	-	16.5.24~16.7.14			
27	市納上第4	" 字幟立	4,230	200	16	確認	縄文[後]	16.5.24~16.7.14	報告書刊行		
28	市納上第5	" "	1,400	40	16	確認	-	16.5.24~16.7.14			
29	虚空蔵免	" 字鷲戸ノ本・赤坂・天神本	7,320	750	15	確認	縄文[早]	15.11.11~16.1.30	報告書刊行		
30	赤石・天神本	" 字鷲戸ノ本・北原	41,000	6,630	15	確認・本掘	縄文[草創・早], 弥生	15.9.16~15.12.25	報告書刊行		
31	天神本第2	" 字北原	1,360	220	15	確認	旧石器, 縄文[早], 弥生	16.1.26~16.2.20	報告書刊行		
				660				16		本掘	16.7.12~16.9.17
32	大内原	" 字北原	3,625	325	15	確認	弥生, 古墳, 中世, 近世	15.11.10~16.1.22	報告書刊行		
				3,300				16		本掘	16.11.8~17.3.30
				670				13		確認	13.9.12~13.10.15
2,680	15	確認	15.5.1~15.7.22								
2,280			15	確認	15.7.2~15.9.29						
33	中ノ迫第1	" 字中の迫			79,800	4,100	16	本掘	旧石器, 縄文[早], 弥生	15.11.12~16.3.31	
			2,600	15		確認				16.4.1~16.6.9	
			6,000	16		本掘(二次)				16.2.2~16.3.30	
			6,000							16	

※ゴシック文字の遺跡は、調査終了。
 ※「遺跡面積」は当初の計画面積、「調査面積」は、実掘表面積
 ※数値等は平成17年12月末時点のもの

表1 東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡一覧 2

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積(m ²)	調査面積(m ²)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考	
川南町	34	中ノ迫第2	川南町大字川南字中の迫	20,300	720	13	確認	旧石器, 縄文[早]	13.10.15~13.11.30	17年度調査終了予定	
					340	16	確認		17.2.16~17.3.18		
					19,130	17	本掘		17.6.9~		
	35	中ノ迫第3	" 字中の迫	10,200	480	16	確認	旧石器, 縄文[早]	16.5.24~16.7.7		
					2,560		本掘		16.11.26~17.3.31		
	37	前ノ田村上第1	" 字須田久保	20,100	2,130	20	確認	-	16.5.24~16.7.7	報告書刊行	
					900		13		確認		13.9.11~13.11.15
					5,200		14		本掘(一次)		13.12.13~14.3.29
					500		14		確認		14.4.4~14.10.11
	38	前ノ田村上第2	" 字前ノ田	10,900	2,154	13	確認	旧石器, 縄文[草創・早], 弥生	14.10.15~14.10.30	一部未調査	
					6,045		17		本掘		14.12.12~15.3.31
					4,900		15		本掘(二次)		15.4.4~15.5.9
	39	赤坂	" 字山下道上・東国光	17,400	4,300	15	本掘(三次)	弥生, 中世, 近世	15.6.23~15.12.12		
					3,000		15		確認		16.2.2~16.3.30
					16,700		16		本掘		16.6.1~17.3.30
	40	国光原	" 字国光原	18,780	3,000	15	確認	旧石器, 縄文[草創・早], 弥生, 中世	16.2.2~16.3.30		
2,000					16		本掘		16.6.10~17.3.31		
3,400					17		本掘		17.4.1~17.8.30		
41	湯牟田	" 字湯牟田	21,750	1,350	13	確認	旧石器, 古代以降	13.10.2~13.11.29	報告書刊行		
				2,350		14		本掘(一次)		13.12.10~14.3.29	
				750		15		確認		14.4.3~14.7.31	
				9,600		16		本掘(二次)		15.5.1~15.7.4	
42	西ノ別府	" 字尾花坂上	13,000	1,670	16	確認	旧石器, 縄文[早], 弥生, 古墳, 中世	16.5.24~16.7.14	報告書刊行		
				4,750		本掘		16.12.13~17.3.30			
				1,200		16		確認		16.5.24~16.7.7	
5,700	本掘(一次)	16.9.1~17.3.31									
100	確認	17.4.1~									
2,434	17	本掘(二次)	17.8.22~17.8.23								
260		確認	17.10.3~								
4,800		本掘(三次)	17.10.11~17.10.28								
高鍋町	44	竹鳩	高鍋町大字上江字五郎丸	7,100	516	13	確認	-	13.10.2~13.10.5		
					65		13		確認		14.1.16~14.1.23
	45	崩戸(青木)	" 字崩戸	800	585	14	本掘	縄文[草創・早・前], 中世	14.5.1~14.7.18	報告書刊行	
					39		12		確認		12.8.7~12.8.21
					145		13		確認		13.12.17~13.12.27
					10,116				本掘		14.1.15~14.3.29
	46	野首第1	" 字野首	10,600	300	16	本掘	縄文[早~晩], 古墳, 中世, 近世	15.4.1~16.3.29	報告書刊行	
					14		本掘		16.6.1~16.8.6		
					15		本掘		14.4.8~15.3.31		
					16		本掘		14.1.15~14.3.29		
					13		確認		13.12.17~13.12.27		
	47	野首第2	" 字青木	13,800	150	12	確認	旧石器, 縄文[早・後~晩], 古墳, 古代, 中世, 近世	12.6.19~12.6.28	一部未調査	
					13		確認		12.8.7~12.8.22		
					2,450		14		本掘		12.9.28~12.10.13
					8,600				本掘		13.3.12~13.3.16
					16				本掘		13.5.7~14.3.29
48	南中原第1	" 字北中原	14,700	200	13	確認	旧石器, 縄文[早・後~晩], 弥生	14.2.26~14.3.18	一部未調査		
				120		15		確認		15.5.1~15.6.23	
				350		16		本掘		16.5.24~16.6.30	
				12,050				本掘		17.1.5~17.3.31	
49	南中原第2	" 字北中原	3,500	180	15	確認	-	17.4.1~17.12.16			
				17		本掘		15.5.1~15.6.23			
50	老瀬坂上第3(老瀬坂上)	" 字北中原	6,600	110	13	確認	旧石器, 縄文[早], 古代	13.6.8~13.7.5	報告書刊行		
				6,490		14		本掘		13.9.3~14.3.29	
51	下耳切第3	" 字下耳切	22,500	210	12	確認	古墳~古代	12.6.19~12.6.28	報告書刊行		
				6,790		本掘(一次)		12.8.7~12.8.22			
				7,000		13		本掘(一次)		12.9.4~13.3.30	
				6,800		14		本掘(二次)		13.4.4~14.3.29	
							縄文[早]	14.5.23~14.8.29			

※ゴシック文字の遺跡は、調査終了。
 ※「遺跡面積」は当初の計画面積、「調査面積」は、実掘表面積
 ※数値等は平成17年12月末時点のもの

表1 東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡一覧 3

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積(m ²)	調査面積(m ²)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考		
高鍋町	52	北牛牧第5	高鍋町大字上江字牛牧	27,800	200	12	確認	旧石器, 中世	12. 6. 15～12. 6. 28	報告書刊行 一部未調査		
									12. 8. 7～12. 8. 22			
							12. 10. 2～12. 10. 11					
							13. 2. 16～13. 2. 21					
			9,800	13	本掘(一次)	12. 9. 4～13. 3. 30						
			8,000		本掘(二次)	13. 4. 4～14. 3. 29						
	53	唐木戸第1	" 字北唐木戸	17,600	300	13	確認	旧石器, 縄文[早]	14. 3. 6～14. 3. 8	報告書刊行		
					2,000	14	本掘(一次)		14. 5. 7～14. 8. 29			
					700	14	確認		15. 2. 3～15. 2. 24			
			5,500	15	本掘(二次)	旧石器, 縄文[早], 中世	15. 5. 6～15. 9. 5					
54	唐木戸第2	" 字北唐木戸	5,600	480	13	確認	縄文[早], 中世	14. 3. 11～14. 3. 22	報告書刊行			
				4,200	14	本掘		14. 9. 2～15. 3. 7				
55	唐木戸第3	" 字北唐木戸	2,900	25	12	確認	旧石器, 縄文[草創・早]	12. 6. 19～12. 6. 22	報告書刊行			
								13. 2. 13～13. 2. 15				
						2,875		13		本掘	13. 10. 15～14. 3. 29	
			14	14. 4. 3～14. 7. 30								
56	唐木戸第4	" 字北唐木戸	8,010	88	12	確認	旧石器, 縄文[草創・早]	12. 6. 19～12. 6. 27	報告書刊行			
								12. 8. 7～12. 8. 10				
						7,812		13		本掘	13. 5. 7～13. 12. 27	
		110	13	確認		14. 2. 4～14. 2. 22						
57	唐木戸第5	" 字北唐木戸	2,400	200	13	確認	—	14. 2. 25～14. 3. 6				
58	小並第1	" 字西小並	7,700	650	13	確認	旧石器, 縄文[草創・早]	13. 5. 13～13. 6. 8	報告書刊行			
						7,050		14		本掘	13. 9. 3～14. 3. 29	
								14. 4. 3～14. 12. 25				
59	小並第2	" 字黒土田	2,700	50	13	確認	—	13. 5. 13～13. 6. 8				
						220	13	確認	14. 2. 6～14. 2. 25			
60	牧内第1	" 字牧内	14,400	296	12	確認	旧石器, 縄文[草創]	12. 8. 7～12. 8. 11	報告書刊行			
										12. 10. 2～12. 10. 16		
						2,104		13		本掘(一次)	12. 11. 6～13. 3. 30	
						3,400				本掘(二次)	13. 4. 3～14. 3. 29	
						3,700		14		本掘(三次)	旧石器	14. 1. 10～14. 3. 29
												14. 4. 3～14. 11. 29
		4,900	14	本掘(四次)	旧石器, 縄文[草創]	14. 9. 17～15. 3. 31						
			15		15. 4. 1～15. 6. 23							
61	牧内第2	" 字牧内	8,000	56	12	確認	旧石器, 縄文[草創]	12. 8. 7～12. 8. 11	報告書刊行			
										13. 2. 5～13. 2. 14		
						529		13		確認	13. 6. 4～13. 6. 27	
		4,715	13	本掘	13. 8. 20～14. 3. 29							
62	音明寺第1	新富町大字新田字音明寺	8,500	150	12	確認	旧石器, 縄文[早], 中世以降	12. 4. 13～12. 4. 18	報告書刊行			
										12. 6. 5～12. 6. 14		
						5,350		13		本掘	12. 9. 4～13. 3. 30	
							13. 4. 3～13. 7. 31					
63	音明寺第2	" 字音明寺	16,800	200	12	確認	旧石器, 縄文[早], 中世以降	12. 6. 5～12. 6. 14	報告書刊行			
										12. 7. 24～12. 8. 1		
						2,100		13		本掘(一次)	12. 9. 4～13. 2. 21	
						500		13		確認	14. 1. 30～14. 2. 20	
		5,700	14	本掘(二次)	14. 5. 16～14. 12. 26							
64	東畦原第1	" 字下迫口	14,800	712	13	確認	旧石器, 縄文[早・草創]	13. 8. 6～13. 8. 31	報告書刊行			
										13. 11. 1～14. 3. 29		
						5,088		14		本掘(一次)	14. 4. 1～14. 9. 30	
						588		13		確認	14. 1. 30～14. 2. 20	
						2,200		14		本掘(二次)	14. 5. 20～14. 12. 26	
						3,800		14		本掘(三次)	14. 11. 11～15. 3. 31	
						15. 4. 1～15. 6. 6						
		3,000	15	本掘(四次)	15. 8. 1～16. 3. 31							
			16		16. 4. 1～16. 7. 15							
65	東畦原第2	" 字中原	7,200	518	13	確認	旧石器, 縄文[早]	13. 8. 6～13. 8. 31	報告書刊行			
										13. 11. 1～14. 3. 29		
						3,482		14		本掘(一次)	14. 4. 3～14. 8. 9	
		3,100	14	本掘(二次)	14. 9. 24～15. 2. 14							
66	東畦原第3	" 字大中原	9,000	200	12	確認	旧石器	12. 7. 24～12. 8. 4	報告書刊行			
										12. 9. 9～12. 9. 29		
						5,200		13		本掘(一次)	12. 11. 6～13. 3. 30	
		1,800	13	本掘(二次)	13. 4. 3～13. 9. 28							

※ゴシック文字の遺跡は、調査終了。
 ※「遺跡面積」は当初の計画面積、「調査面積」は、実掘表面積
 ※数値等は平成17年12月末時点のもの

表1 東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡一覧 4

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積(m ²)	調査面積(m ²)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考
新富町	67	西畦原第1	新富町大字新田字吐合	26,350	250	12	確認	旧石器, 縄文[早], 弥生	12.6.5~12.6.13	報告書刊行
					2,950	12	本掘(一次)		12.7.24~12.8.3	
					2,700	13			12.9.9~12.9.29	
					7,550	14	本掘(二次)		12.9.4~13.3.30	
	68	西畦原第2	" 字前原	18,300	400	12	確認	旧石器, 縄文[早]	12.6.5~12.6.8	報告書刊行
					7,980	13	本掘(一次)		12.9.20~12.10.5	
					360		確認		13.5.7~14.3.29	
					760	14	本掘(二次)		14.2.12~14.3.12	
					3,700	15	本掘(三次)		14.9.24~14.12.26	
	69	上新開	" 字上新開	19,900	490	14	確認	旧石器, 縄文[早]	14.8.26~14.9.13	報告書刊行
					3,710	15	本掘		14.11.9~15.3.31	
	70	一丁田	" 字巻丁田	14,900	44	12	確認	-	12.7.24~12.8.3	
					104	13	確認		13.8.6~13.8.31	
					166	14	確認		14.9.3~14.9.25	
	71	勘大寺	" 字駒取場	16,900	370	12	確認	旧石器, 縄文[早]	12.4.13~12.4.18	報告書刊行
					2,500	14	本掘(一次)		12.7.19~12.7.28	
					1,800	16	本掘(二次)		14.9.9~15.2.28	
					3,000	17			16.9.1~17.3.31	
	72	永牟田第1	" 字永牟田	5,100	90	12	確認	旧石器, 弥生	12.9.30~12.10.6	報告書刊行
					300	15	本掘		15.5.1~15.6.6	
1,800						15.9.11~15.12.25				
73	永牟田第2	" 字永牟田	24,600	550	12	確認	旧石器, 縄文[早]	12.6.5~12.6.12		
				60	14	確認		12.8.1~12.8.4		
				1,540	16	本掘		12.9.20~12.10.2		
								14.12.3~14.12.13		
74	尾小原	" 字尾小原	25,600	928	12	確認	旧石器, 縄文[草創・早]	12.3.23~12.3.29	報告書刊行	
				4,572	13	確認		13.5.14~13.6.1		
					14	本掘(一次)		13.11.1~14.3.29		
				350	15	確認		14.4.1~14.8.30		
				5,000	15	本掘(二次)		15.5.1~15.7.14		
				400	16	確認		15.9.4~16.1.29		
				1,200	17	本掘(三次)		16.9.8~16.10.15		
800		16.12.1~17.3.31								
75	向原第1	" 字綿内	15,300	800	11	確認	旧石器, 縄文[早], 弥生, 古墳[前]	12.3.21~12.3.28	報告書刊行	
				500	12	確認		12.9.14~12.9.29		
				385	13	確認		13.11.2~13.11.28		
				2,315	14	本掘		14.3.11~14.3.29		
76	向原第2	" 字綿内	7,000	800	11	確認	-	14.4.3~14.8.10		
				42	13	確認		14.12.13~14.12.25		
77	藤山第1	" 字綿内	4,600	500	14	本掘(一次)	旧石器, 縄文[早], 古墳	13.11.1~13.11.20		
				1,800	16	本掘(二次)		14.6.3~14.7.15		
78	藤山第2	" 字藤山	2,200	60	12	確認	縄文[早]	16.7.13~16.9.24	報告書刊行	
				940		本掘		12.7.24~12.8.4		
西都市	宮ノ東	西都市大字岡富字宮ノ東	21,900	800	11	確認	旧石器, 弥生, 古墳, 古代, 中世, 近世	12.9.4~13.1.9		
				410	15	確認		12.1.24~12.3.29		
				8,100	16	本掘		15.7.3~15.9.2		
80	宮ノ前	" 字宮ノ前	200	12	12	確認	-	15.10.6~16.3.31		
								16.4.1~17.3.31		
								12.9.25~12.9.27		

※ゴシック文字の遺跡は、調査終了。
 ※「遺跡面積」は当初の計画面積、「調査面積」は、実掘表面積
 ※数値等は平成17年12月末時点のもの

第3節 基本層序

現在、宮崎県埋蔵文化財センターでは東九州自動車道関連の遺跡調査に際して、新富・高鍋町域の発掘成果をもとに基本層序を作成し、遺跡間の共通理解を図っている。しかし、発掘調査の対象となる地域が次第に北へと移り、従来から指摘されていたように、既存の基本層序が対応しない場合が多くなっている。

そこで、本年度調査に着手した都農町域での調査成果をふまえ、新富・高鍋・川南町域との対応関係を作成した基本層序が表2である。基本層序においては、火山灰層は略号、火山灰降下後に発達するローム層はML、さらにローム層が土壌化した黒色土帯はMBの記号を用いて表している。

新富・高鍋・川南町域で確認されていた数種の火山灰層のうち、都農町域でも肉眼で明瞭に確認できるものはK-AhとATのみである。この他に、Kr-KbはML1下部に相当するローム層に僅かに含まれる状態で確認できる場合があり、朝倉遺跡や朝草原遺跡はその例である。また、立野第5遺跡では局地的にKr-Iwの堆積も確認されている。また、川南町域で不明であったKr-Iw下層の状況も、Kr-Iwの良好

な堆積が確認された中ノ迫第2遺跡の状況から、新富・高鍋町域の状況との対応関係が今後の調査により明らかとなる可能性がある。

前述したように、調査区が北へと移り、既存の基本層序に対応しない層序の位置づけに問題が生じている。特にSz-Sを挟み上下に分かれるとされるML1についてはSz-Sの堆積が川南町以北より肉眼で確認される例が極端に少なく、上下に分かれるML1の境界が不明確となっている。このため都農町域では表2に示すとおり、ML1(上部)・ML1(下部)と仮に設定し、ML1を区分しているが、Sz-Sを挟み上部・下部とされる新富・高鍋の状況とは異なっており、遺跡間での共通理解を図る上でも今後ML1の区分を明確にする必要がある。

良好な火山灰堆積が確認されている新富・高鍋町域の基本層序を活用させるためにも、今後は層序による対比だけでなく、調査により確認された遺構・遺物の状況と照らし合わせた対比を行うことによって遺跡間対比を行うことが必要であろう。

(文責 岸田裕一)

1) 宮崎県埋蔵文化財センター『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書V』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第111集)2005

表2 東九州自動車道都農町域基本層序(新富・高鍋町域、川南町域との対応関係)

都農町域基本層序		川南町域基本層序		新富・高鍋町域基本層序		年代
No.	略称	略称	層名	略称	層名	
1			表土		表土	
2	クロボク	クロボク	黒色土	クロボク	黒色土	
3	K-Ah	K-Ah	鬼界アカホヤ	K-Ah	鬼界アカホヤ	6.5ka
4	MB0	MB0	黒褐色ローム	MB0	黒褐色ローム	
5	ML1上部	ML1	暗褐色ローム	ML1	暗褐色ローム	
6	ML1下部	Sz-S	桜島薩摩	Sz-S	桜島薩摩	11ka
7		ML1	褐色ローム	ML1	褐色ローム	
8	Kr-Kb	Kr-Kb	小林軽石を含む層	Kr-Kb	小林軽石を含む層	15ka
9	MB1~ML2	MB1	暗褐色ローム	MB1	暗褐色ローム	
10		ML2	褐色ローム	ML2	褐色ローム	
11	AT	AT	始良Tn	AT	始良Tn	24.5ka
12	MB2	MB2	暗褐色ローム	MB2	暗褐色ローム	
13	MB3	MB3	暗褐色ローム	A-Fm	始良深港	26.5ka
14		ML3	褐色ローム	A-Ot	始良大塚	30ka
15	ML3	ML3	褐色ローム	MB3	暗褐色ローム	
16	Kr-Iw	ML4	明褐色ローム	ML3	褐色ローム	
17		ML4	明褐色ローム	Kr-Aw	アワオコシ	41ka
18		Kr-Iw	イワオコシ	ML4	明褐色ローム	
19			明黄褐色ローム	Kr-Iw	イワオコシ	50ka
20			キンキラローム		明黄褐色ローム	
		A-Iw	始良岩戸		キンキラローム	
		Aso-4	阿蘇4	A-Iw	始良岩戸	60ka
				Aso-4	阿蘇4	86~90ka

※年代は奥野充・福島大輔・小林哲夫「南九州のテフクロノロジー」(『人類学研究』12 2000)による。未較正。

第4節 遺跡の立地と環境

本年度の東九州自動車道（都農～西都間）の発掘調査は主体となる川南町に加え、新たに都農町内の遺跡調査が本格的に行われている。都農町は、段丘・扇状地群からなる台地から特徴づけられる宮崎平野を形成する北端部最後の地域となっている。そこで今回、都農町を中心とする地勢を概観し整理を行うこととする。

【都農町の地勢概観】

都農町は宮崎県中央部よりやや北側に位置し、東は日向灘に面し、南は名貫川を境に川南町、西は木城町、北は海岸側に日向市、山地側が東郷町に接している。

尾鈴連山を西に有し、次第に高度を減じて、日向灘に向かって、西高東低の丘陵性台地が形成されている。町内には、名貫川・都農川・心見川によって作られた開析扇状地群が広がり、下流部には沖積低地や河岸段丘が形成されている。そして、日向灘に沿っては海成段丘の性質を持つ平坦面が認められ、上記の開析扇状地群や河岸段丘とは海蝕崖を境として接している。

都農町内は他の宮崎平野部と同じく段丘群が多く存在する。これらの段丘は中期更新世に形成された上・中位段丘面と最終氷期に形成された低位段丘面とにわかれ、それぞれが細かく区分され、名称が付されている。以下各段丘面ごとに整理を行う。

【高・中位段丘面】

唐瀬原面、朝草原面、佃面、豊原面、上菰生面、藤見面、百町原面が相当し、西方で高く、東方に向かい漸次低くなり、海岸線に沿って比高約 50～30m の海食崖が形成されている。

唐瀬原面、朝草原面、佃面の高度は 120～50m で、豊原面、上菰生面、藤見面、百町原面の高度は 70m～20m である。菰生面と佃面とは 10～5m の段丘崖で接している。これらの段丘面は扇状地に特徴的な、1m 大～拳大の尾鈴山酸性岩類・チャート等を含む段丘礫層の上に形成されている。

【低位段丘面】

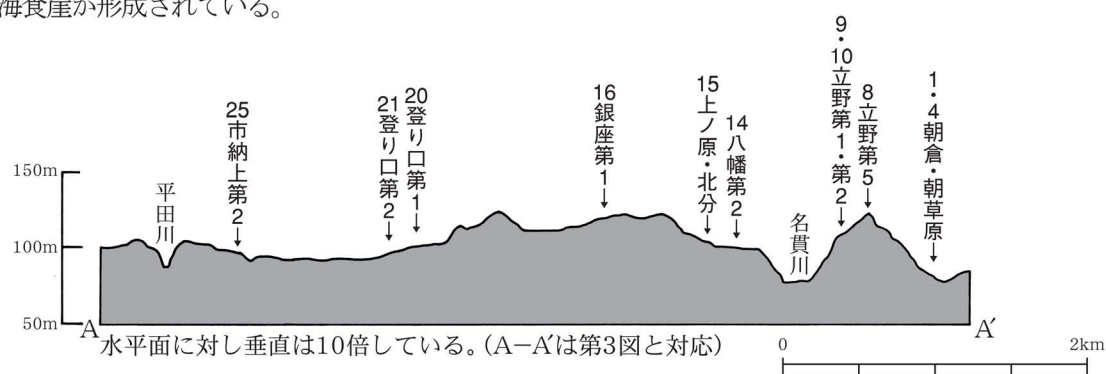
これらはより高位の平坦面より下の、段丘崖に接した各所に分布しており、三日月原面、今新別府面、轟面、新田面が相当する。三日月原面は標高 80～100m で、朝草原面とは 15～10m の段丘崖で接している。今新別府面、轟面、新田面は標高 60～15m をはかる。段丘面はやや砂層を含む段丘礫層状になっているが、礫の大きさ、密度は、高・中位段丘面の礫層よりも薄くなっている。

【まとめ】

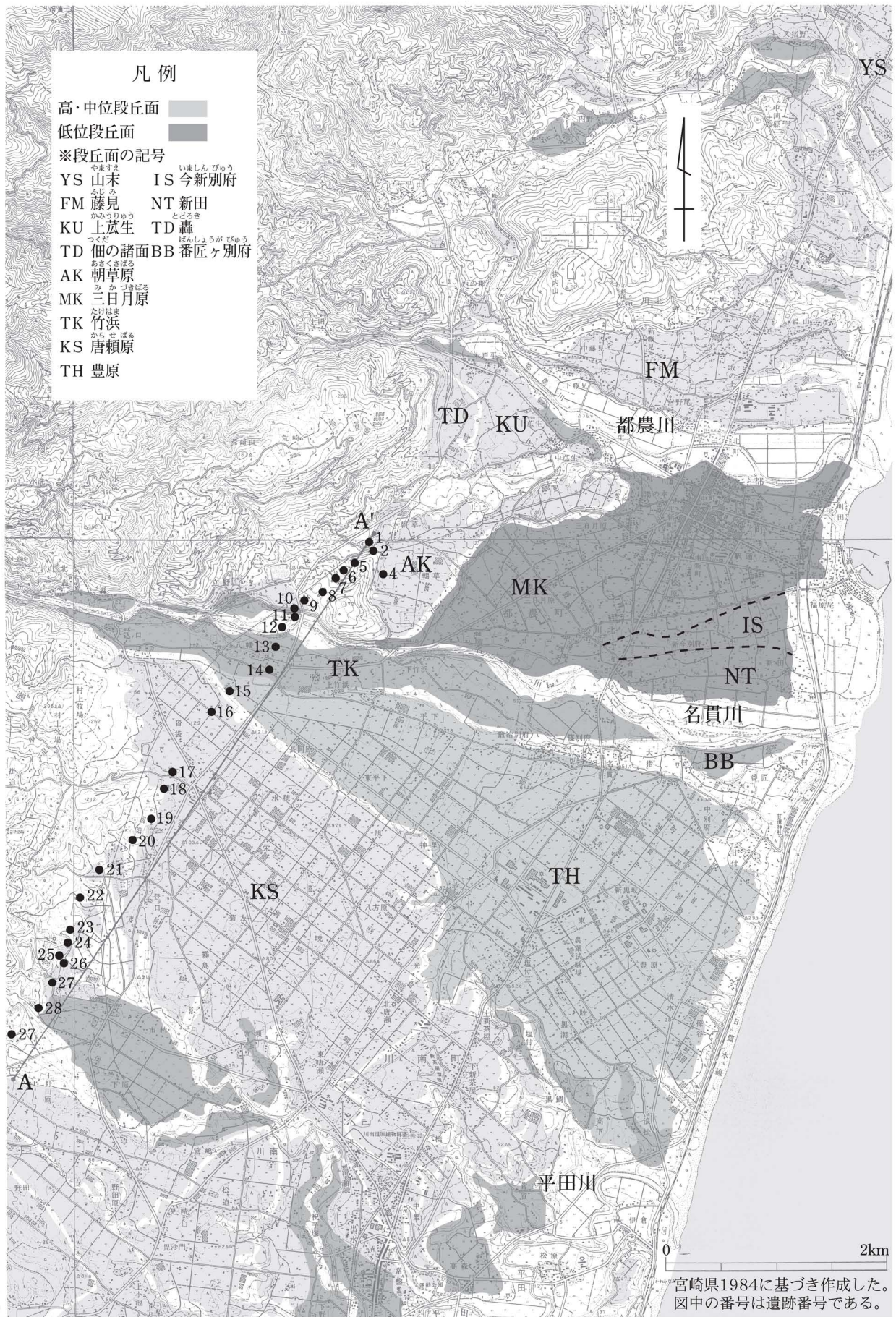
このように都農町は、町内の半分は山地がしめ、少ない平地面に複数の段丘が存在する起伏にとんだ地形をしていることがわかる。都農町内ではこれまで発掘調査の機会が少なく、立地ごとの遺跡の様相はあまり明らかになっていない。今後、東九州自動車道建設に伴う発掘調査の成果をふまえ、どのような遺跡展開がみられるのか考察していくことが望まれる。（文責 日高優子・淵ノ上隆介）

【参考文献】

- 宮崎県農政水産部農業振興課 1984 『土地分類基本調査—都農町—』
 都農町 1998『都農町史』通史編
 早田 勉 1997「三 宮崎平野の地形発達史」『宮崎県史』通史編 原始・古代 I



第2図 名貫川から平田川に至る地形断面図 (S=1/50,000)



第3図 段丘面別遺跡分布図 (S=1/50,000)

第5節 整理作業

今年度は、東九州自動車道関連の46遺跡について整理作業を実施し、18遺跡の発掘調査報告書を刊行した。

本館においては、水洗、注記、接合、実測、拓本の他、報告書作成のための製図、レイアウト作業、遺物写真撮影、収蔵遺物整理並びにフローテーション作業等を行った。

東畦原整理作業事務所では、7遺跡で出土した遺物の水洗、注記、礫整理等を行った。平成14年度に開設した東畦原整理作業事務所は、今年度11月

17日を以て閉所することになり、閉所時まで作業を継続した野首第2遺跡及び宮ノ東遺跡は、センター本館に新設した東九州自動車道整理作業棟において作業を行っている。

以上の他、2遺跡において、発掘作業と並行しながら水洗及び注記作業を行い、整理の進捗を図った。

今年度は、東九州自動車道関連遺跡において、比較的大規模な遺跡の発掘調査が相次いで終了したため、整理作業量も大幅に増加した。来年度にかけて、整理作業を実施する遺跡の数がさらに増加する見込みであり、効率的な進捗を図りながら作業を進めている。(文責 小山 博、興侶慶一、金丸琴路)

表3 整理作業及び報告書刊行を実施した遺跡

【本館】

番号	遺跡名	遺物量(箱)
1	朝倉	(23)
2	尾立第2	—
4	朝草原	(13)
5	尾立第3	(29)
8	立野第5	(76)
10	立野第2	(8)
14	八幡第2	(57)
16	銀座第1	42
17	銀座第2	9
20	登り口第1	11
21	登り口第2	(2)
24	市納上第1	9
25	市納上第2	(123)
27	市納上第4	27
29	虚空蔵免	3
30	赤石・天神本	42
31	天神本第2	2
32	大内原	20
33	中ノ迫第1(一次)	(34)
	中ノ迫第1(二次)	(15)
34	中ノ迫第2	(11)
35	中ノ迫第3	(40)
37	前ノ田村上第1	76
38	前ノ田村上第2	(38)
39	赤坂	(47)
40	国光原	(71)
41	湯牟田(二次)	(140)
42	西ノ別府	26
46	野首第1	200以上
47	野首第2	1,400
48	南中原第1	(24)
50	老瀬坂上	33
51	下耳切第3	207

番号	遺跡名	遺物量(箱)
56	唐木戸第4	30
58	小並第1	(65)
60	牧内第1	(6)
64	東畦原第1(一次)	(19)
	東畦原第1(二次)	6
	東畦原第1(三次・四次)	31
69	上新開	36
71	勘大寺(二次)	(60)
72	永牟田第1	8
73	永牟田第2	(4)
74	尾小原(一次)	(14)
	尾小原(二次)	16
	尾小原(三次)	(8)
75	向原第1	59
77	藤山第1(二次)	(44)
79	宮ノ東	800以上

※太字は今年度報告書を刊行した遺跡

【東畦原整理作業事務所】

番号	遺跡名	作業内容
35	中ノ迫第3	礫整理
39	赤坂	水洗・注記
47	野首第2	水洗・注記
71	勘大寺(二次)	礫整理
73	永牟田第2	礫整理
77	藤山第1	礫整理
79	宮ノ東	水洗

【現場整理作業棟】

番号	遺跡名	作業内容
34	中ノ迫第2	水洗・注記
43	尾花A(一次・二次)	水洗・注記(継続中)

第6節 現地説明会等

埋蔵文化財センターでは、東九州自動車道建設に伴う発掘調査の成果を一般の方々に広く公開するための活動を行っている。

一般的には、発掘調査を実施している現地で、速報的に調査成果を伝えるため検出された遺構や遺物について解説を行う現地説明会や公民館や現場事務所等において遺構や遺物の内容、そして遺跡の性格、特徴などの概要説明や調査状況の写真、遺物等を展示する調査報告会を開催している。

また、教職員の研修や小・中学校等からの要請による児童・生徒の体験発掘・職場体験学習の受入れのほか、埋蔵文化財センター神宮分館での展示、埋蔵文化財講座での遺跡概要報告など様々な形で普及活動を実施している。 (文責 高山 富雄)



写真4 現地説明会(八幡第2遺跡)

表4 現地説明会等実施状況

実施日	遺跡名	実施時間	参加者
5月14日(土)	八幡第2遺跡現地説明会	13:00~15:00	73名
5月17日(火)	勘大寺遺跡(二次)見学	11:00~11:30	56名
25日(水)	* 上新田小学校3年 児童20名 教諭4名 * 上新田小学校6年 児童29名 教諭3名		
5月20日(金)	八幡第2遺跡見学	10:00~11:00	56名
	* 都農南小学校6年 児童53名 引率教諭3名		
7月9日(土)	新富町内遺跡合同調査報告会	13:00~16:20	106名
	* 勘大寺・永牟田第2・尾小原・藤山第1遺跡		
8月11日(木)	南中原第1遺跡見学	13:10~14:10	46名
	* 高鍋中央公民館歴史講座		
8月20日(土)	尾花A遺跡	9:30~12:30	32名
	* 夏休み特別企画「体験講座」 32名		
10月3日(月)	尾花A遺跡(教職経験10年経過研修)	9:00~17:00	18名
~5日(水)	* 発掘調査体験実施・埋文行政研修		
11月7日(月)	南中原第1遺跡(高鍋西小学校 理科校外学習)	7日;9:30~11:30	95名
~8日(火)	* 7日;6年2組・3組 教師4名、児童60名	8日;9:30~11:00	
	* 8日;6年1組 教師2名、児童29名		
11月16日(水)	尾花A遺跡	8:30~16:30	1名
~17日(木)	* 職場体験学習 大宮中学校2年 1名		
2月19日(日)	尾花A遺跡現地説明会	13:00~16:00	110名
3月18日(土)	高鍋町内遺跡調査報告会	13:00~16:20	
	* 唐木戸第4遺跡・南中原第1遺跡		

第Ⅱ章 確認調査の結果

9 たての立野第1遺跡

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、名貫川の左岸に位置し、標高約111m～119mを測る。北側の山手から南側の名貫川に向かって傾斜する地形を造成して宅地や田畑としていた。

(2) 調査の概要

基本層序は表5に示した。各トレンチで堆積状況は異なり、欠落した層も認められる。しかも安定せず、整序だった土層堆積ではない。

4～6 T周辺は立野第5遺跡から続く傾斜地である。V b層は、尾鈴山酸性岩類の巨礫が混入するので調査区外からの流入土と考えられる。削器(第6図6)、剥片が出土したが、遺構は認められない。

表5 基本層序

I	表土・客土
II	黒色土
III	K-Ahを含む層
IV	黒褐色土
Va	暗褐色土
Vb	にぶい黄褐色土
VIa	ATを含む黒褐色土
VIb	ATを含む褐色土
VII	ブラックバンドを含む褐色土
VIII	褐色土
IX	小礫を含む層
X	黒褐色土
XI	明褐色土
XII	明黄褐色土 (礫を含む地山層)

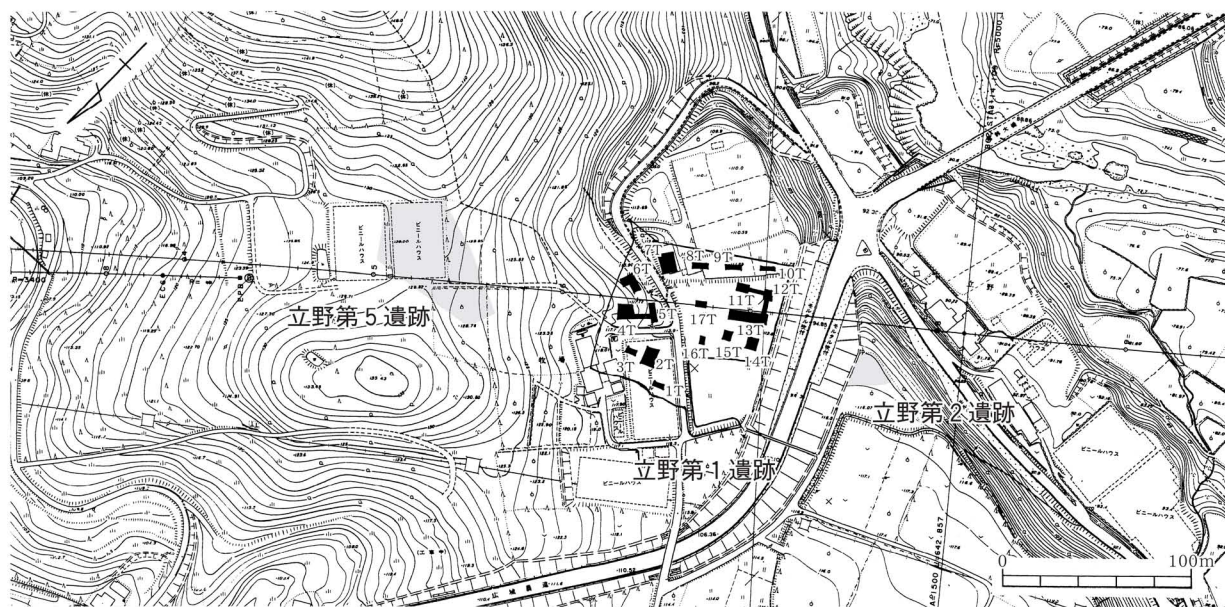
1～3 T・11～17 T周辺は、造成により大半を削平されていた。また、2 T II層上面で自然流路が、14 TではVI b層上面で巨礫が検出されるなど、名貫川に向う自然流路が通時的に形成されていた状況が伺える。各トレンチとも遺構は認められない。遺物は、各トレンチより礫器(第6図7)やナイフ形石器(第6図4)、縄文土器(第6図1～3)が出土したが、量的に少なく、散漫な出土状況を示した。

7～10 T周辺では、旧地形に伴って土層堆積の傾斜が著しい。小礫を含む層も検出されたことから、他トレンチ同様に流水作用を受けていたと考えられる。しかも、小礫を含む層は、表土下面で検出されたため削平を大きく受けたことが伺える。

7 Tでは砂層を含む層が何重にも堆積し、自然流路と考えられる。その中に赤化礫が混入していた。

(3) 小 結

確認調査の結果、旧地形は自然流路が幾筋に広がる谷地形と推定される。各トレンチとも遺構は、確認されなかった。また、後期旧石器時代～縄文時代早期に属する遺物が出土したが、散発的で磨耗を受けているため、本遺跡上方の丘陵部周辺からの二次的移動によるものと思われる。従って本調査の必要はないと考えられる。(文責 安藤利光)



第4図 トレンチ配置図と周辺地形(S=1/4,000)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、名貫川右岸に位置し、川から3段目の河岸段丘状に立地する。調査区の現況は、ほぼ平坦な地形をしているが、昭和15年の地形図では、南側からの丘陵が調査区にかかり、原地形は斜面地である。地域住民からの聞き取りの結果から、ミカンを植える際に造成したとの情報を得ている。

(2) 調査の概要

調査は、南北方向に調査区を縦断する形でトレンチを1本設定し、そのトレンチに直交する東西方向のトレンチを3本設定した(第5図)。

調査の結果、調査区中央部分が最も低く、Ⅲ層は調査区の南側3/4までは良好に堆積していることが判明したが、北側1/4は削平をうけて残存していない。さらにV~VI層の色調・質感が非常に似通っており、分層することが困難であるとともに、層厚は最大で1mを超える。Ⅲ層の状況と合わせて、旧来の地形は谷部と考えられる。遺物は、姫島産黒曜石製打製石鏃1点、ホルンフェルス製スクレイパー1点が出土した(第6図10・11)。

石鏃が出土した地点は、谷部の底近くのⅣ層である。スクレイパーが出土した地点は、南向きの斜面地、Ⅳ層とⅤ層の境目付近であるが、後世の攪乱を受けて、Ⅳ~Ⅴ層の残りが非常に悪い状態であった。

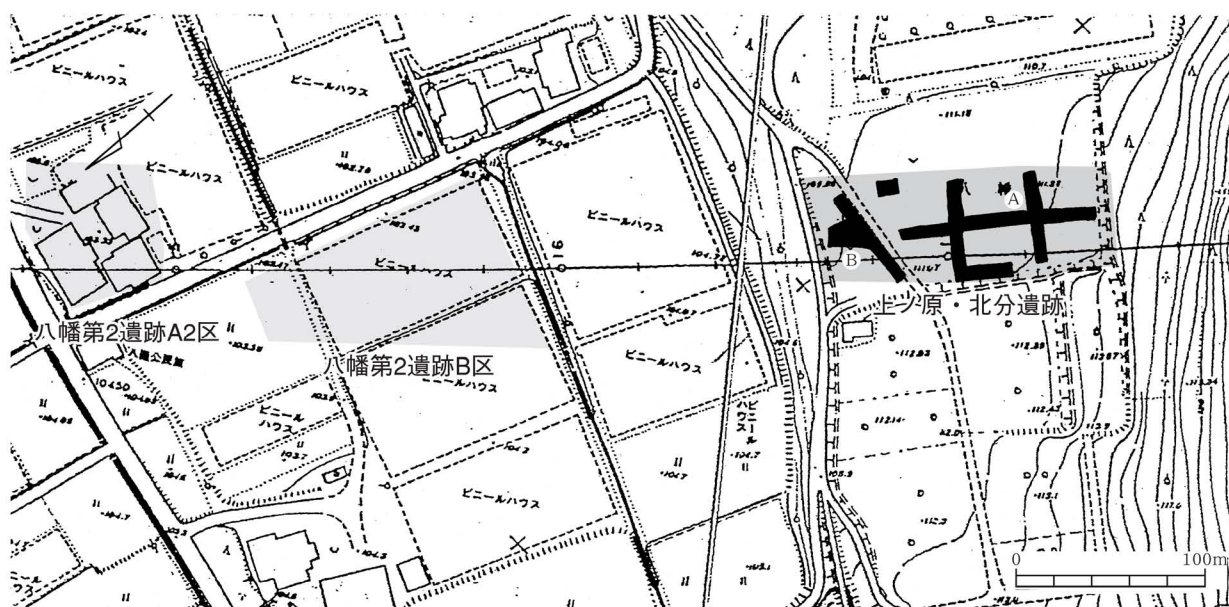
Ⅷ・Ⅸ層からの遺構検出、遺物の出土はなかった。

(3) 小結

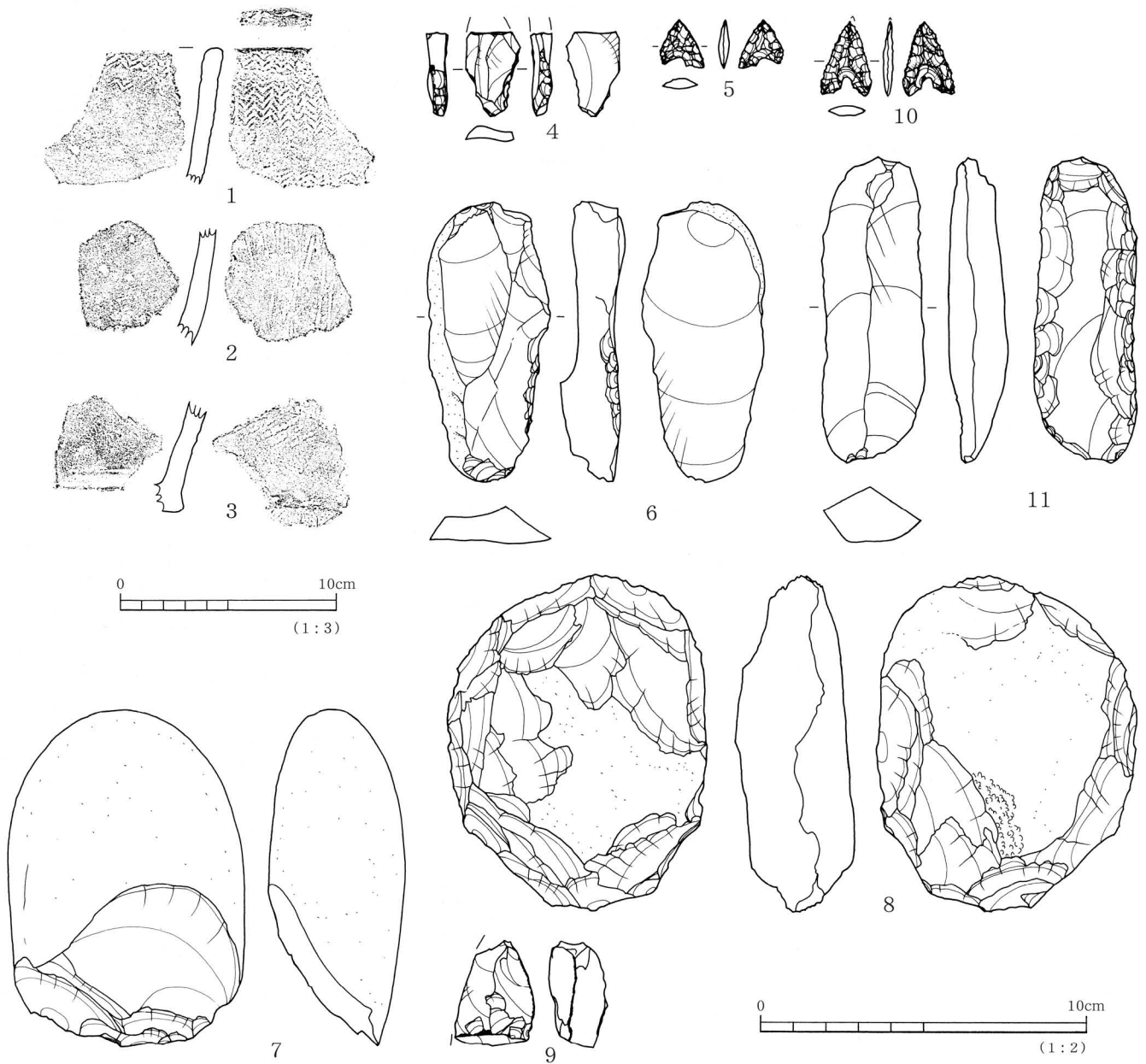
調査区南側3/4は、Ⅲ層は良好に残存していたが、後世のみかん畑耕作による攪乱が激しく、また、遺構検出、遺物の出土はなかった。Ⅳ層~Ⅴ層にかけては、姫島産黒曜石製打製石鏃1点が出土したが、谷部の底近くで出土したこと、ホルンフェルス製スクレイパー1点が出土した地点は、Ⅲ層まで完全に削平をうけ、Ⅳ・Ⅴ層の残存も悪い。谷部のⅠ層が非常に厚いこととⅢ~Ⅴ層の土がブロック状で混じることから、北側の丘陵部を削平し、その土で谷部を埋めた造成を伺わせる。谷部という旧地形と後世の削平の状況から、本調査の必要はないと判断した。(文責 竹田享志)

表6 基本層序

I	表土(客土)
II	クロボク
III	K-Ah
IV	MB0
V	ML1相当
VI	MB1相当
VII	AT
VIII	MB2
IX	MB3
X	褐色土層
XI	礫層



第5図 トレンチ配置図と周辺地形(S=1/4,000)



第6図 立野第1遺跡、上ノ原・北分遺跡出土遺物 (S=1/2、1/3)

表7 立野1遺跡出土石器観察表

遺物番号	種別	器種部位	法量			出土場所	手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴
			口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面		
1	深鉢	口縁部	-	-	-	11T IV層	横方向のナデ後、山形押型文 スス 附着	上部横方向のナデ後、山形押型文 下部横ナデ	赤褐色	明赤褐色	良好	2mm以下の乳白色粒、2mm以下の無色透明や黒色の光沢粒を多く含む
2	深鉢	胴部	-	-	-	11T IV層	横方向のナデ後、貝殻条痕文	ナデ 炭化物附着	赤褐色	明赤褐色	良好	2mm以下の茶褐色粒、2mm以下の無色透明や黒色の光沢粒を多く含む
3	深鉢	底部	-	-	-	3T I層	上部下部ともに斜位方向の縄文 下部はその後ナデ	横ナデ 下部工具痕	にぶい赤褐色	赤褐色	良好	2mm以下の乳白色粒、2mm以下の無色透明や黒色の光沢粒を多く含む

表8 立野1遺跡・上ノ原・北分遺跡出土石器計測表

遺物番号	遺跡名	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
4	立野第1	ナイフ形石器	13T IV層	2.6	1.7	0.7	2.5	ホルンフェルス
5	立野第1	打製石鏃	5T I層	1.5	1.4	0.4	0.5	サヌカイト
6	立野第1	削器	5T IX層	8.6	3.8	1.6	59.3	ホルンフェルス
7	立野第1	礫器	12T Va層	10.5	7.4	4.3	435.6	ホルンフェルス
8	立野第1	石核	14T IV層	10.4	8.1	3.5	359.1	ホルンフェルス
9	立野第1	火打石	12T II層	3.3	1.9	1.6	13.2	チャート
10	上ノ原・北分	打製石鏃	第5図A地点	2.3	1.6	0.3	0.8	姫島産黒曜石
11	上ノ原・北分	削器	第5図B地点	9.5	3.2	1.7	60.6	ホルンフェルス

第三章 本調査の結果

1 あさくら 朝倉遺跡

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、都農町の南西部に位置し、名貫川開折扇状地群に属する台地上に立地する。調査区は、北東に向かって緩斜面になっており、標高は80m～84mである。

調査区周辺には、南に約0.5km離れた地点に尾立第3遺跡が、東に約0.6km離れた地点に朝草原遺跡が立地し、共に旧石器時代～縄文時代の遺物・遺構が確認されている（第8図）。

(2) 調査の概要

調査区は、町道を挟んで西側をA区、東側をB区（尾立第2遺跡）として調査を行っており、いずれの調査区においても旧石器時代包含層を中心に、縄文時代早期に帰属する遺構・遺物が確認されている。

① 後期旧石器時代

A区においてMB2（Ⅷa層）を出土層準とするAT下位黒色帯石器群、ML1下部（Ⅴa層）、ML1上部（Ⅳ層）を出土層準とするAT上位石器群が確認されており、B区に対してもAT下位を除き、

A区同様の遺構・遺物が確認されている。A区・B区より検出した礫群は60基を超え、その規模、赤化状況、礫構成等いくつかのバリエーションがみられる。また、礫群の検出層に関してもML1下部、AT直上、MB2とその帰属時期に差異が考えられる（巻頭写真2上段参照）。

遺物としては、AT下位黒色帯中よりナイフ形石器等が出土している。縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器で、頁岩、ホルンフェルス等の石材を用いている。また、AT直下においては1m×1mの範囲内に黒曜石の剥片や碎片が集中してみられる箇所も確認している（巻頭写真2）。さらに、AT下位暗色帯～ML3よりホルンフェルスを石材とした局部磨製石斧が確認されている。

AT上位石器群はML1下部～ML1上部を中心に出土している。ナイフ形石器、台形石器、角錐状石器等が確認されており、角錐状石器は最大長5cm大から、10cm大のものとの開きがあり、同一層からの出土ではあるがその規模に違いがみられる。また、ナイフ形石器終末期とされる、縦長剥片を素材に用い、基部加工を主とした資料もML1上部より確認されている。

細石器文化期の資料もML1～MB0において、確認されている。出土細石刃核は15点を超え、船野型細石刃核と黒曜石を石材に用いた背面に自然面を残す小形の細石刃核が確認されている。



第7図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)



写真5 SZ1半截状況(南西より)



写真6 SX1半截状況(西より)

② 縄文時代

縄文時代の遺構・遺物はML 1 上部 (IVa 層) ～ MB 0 (Ⅲ層) を主として確認されている。遺構としては集石遺構が現在 3 基検出されている。遺物では縄文土器 (無文、押型文、貝殻押圧文) と共に、石鏃、石斧等の石器群が確認されている。

このうち、特筆すべきこととして、貝殻施文の尖底土器の出土がある。この資料は尖底の部分に貝殻腹縁刺突を施し、胴部へは貝殻押圧を施す。器壁は厚い。貝殻施文を施す尖底土器の出土は宮崎県内では類例が見られず、器形は押型文土器、施文は貝殻条痕の影響を受けていると考えられる。出土層位からは押型文土器と層位的に区別ができない状況から押型文土器と同時期と考えられ、縄文時代早期に帰属すると考えられる。

③ 不明遺構

A区西側より弥生時代終末～古墳時代初頭の時期と考えられる甕およそ 6 個体が出土する土坑 1 基を検出した (写真 5)。検出される土器の器種全てが甕であること、土坑内より不正形な巨石がみられることを考慮すると廃棄土坑の可能性がある。

また、調査区南西側より石組遺構が検出された (写真 6)。平面形のプランは長軸 2.3m、短軸 1.7m を測るが、遺構の底には敷石がなされず、貼床等も確認されていない。石組内より流れ込みと考えられる比較的新しい釘が出土したが、遺構の時期決定となる遺物等は確認されず、その詳細な時期は不明である。

(3) 小結

本遺跡では、後期旧石器時代から縄文時代早期の遺物・遺構が確認され、さらに弥生時代終末前後と考えられる遺構が検出されている。このうち、後期旧石器時代に比定される時期 (ML 1 上部～AT 下位暗色帯) は遺物量・遺構数が他時期に比べ割合が多く、本遺跡の主体をなしている。検出される遺構には礫群・土坑があるが、礫群の検出層は MB 2、AT 直上、ML 1 下部と層位的に 3 大別されることは注目される。前述したように、礫群にはその規模だけでなく赤化状態にも差異が観察され、その所属時期だけでなく、機能的な面についても検討を行う必要がある。

遺物についてもナイフ形石器や角錐状石器等には石器の形態にバリエーションがみられ、石器群の変遷を考える上で重要である。現在出土している遺物からは、細石刃・細石刃核が出土した細石器文化の存在と共に、出土石器群の特徴から AT 上位では 2～3 時期に、AT 下位では AT 下位暗色帯出土の遺物と AT 下位暗色帯～ML 3 より確認された局部磨製石斧を含む石器群の 2 時期に細分を行える可能性がある。今後、遺物出土レベルや母岩別資料の検討を行うことによって詳細が明らかになっていくであろう。 (文責 岸田裕一)

	表土
I	黒色土(クロボク)
II	鬼界アカホヤ(K-Ah)
III	黒褐色土(MB0) ▲▲▲▲▲
IV	暗褐色土(ML1上部)
Va	褐色土(ML1下部) ▲▲▲▲▲
Vb	小林軽石を含む層(Kr-Kb)
VI	暗褐色土 ▲▲▲▲▲
VII	始良Tn火山灰(AT)
VIIIa	黒褐色土(MB2) ▲▲▲▲▲
VIIIb	黒褐色土(MB3)
IX	明褐色土(ML3)
X	褐色土

縄文早期遺物包倉層
後期旧石器時代⑤(細石刃石器群)

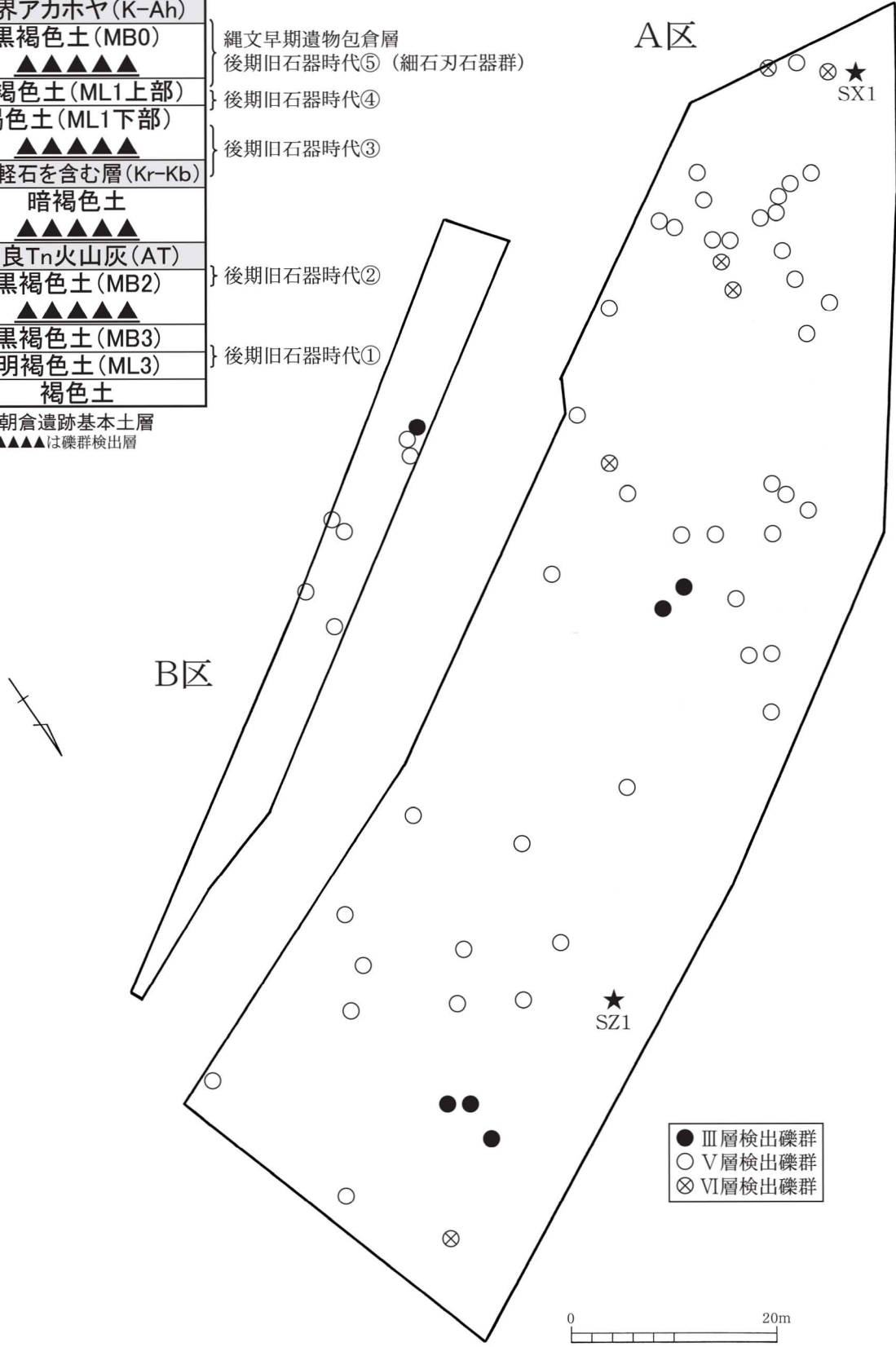
後期旧石器時代④

後期旧石器時代③

後期旧石器時代②

後期旧石器時代①

表9 朝倉遺跡基本土層
※▲▲▲▲▲は礫群検出層



第8図 AT上位遺構分布図(S=1/600)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、名貫川を南に望む大師山の東部山裾と、山裾から広がる台地平坦面に位置する。標高は約 80 m を測る。山裾は大幅な削平を受けており、階段状に平坦に整地されている。

(2) 調査の概要

調査対象区が遺跡の東端と西端に大きく離れていたため、東端を A 区、西端の平坦面を B 区、山裾の階段上に平坦に整地されたところを C 区とした。

いずれの区も表面は平坦であるが、AT まで掘り下げると A 区は東から西に、B・C 区は西から東に向かって緩やかに傾斜している。よって、旧地形は A 区と B 区の間は谷地形になっていたことが分かる。

①後期旧石器時代

A 区では、ML1 下部相当 (VI 層) から剥片が出土する。また、ML1 上部相当 (V 層) からは剥片の他、細石刃核 (船野型)、細石刃が出土している。

B 区は削平が著しく、表土下は MB2・MB3 相当の暗褐色土 (X 層) と下層の明褐色土 (XI 層) が混在する層から始まる。傾斜地になっており、B 区

内の高低差は約 1 m を測る。その中で B 区からは AT 下位と思われる礫群が 2 基検出されている。2 基とも掘り込みを持たない。傾斜地のため大部分流されてしまっていたが、AT より上位から検出される礫群より規模は大きいように思われる。遺物はわずかだが SI4 の周辺から剥片が集中して出土した。

C 区においては、ML1 下部相当 (VI 層) から礫群が 1 基 (SI3) 検出された以外は、遺物らしいものは見受けられなかった。

②縄文時代草創期

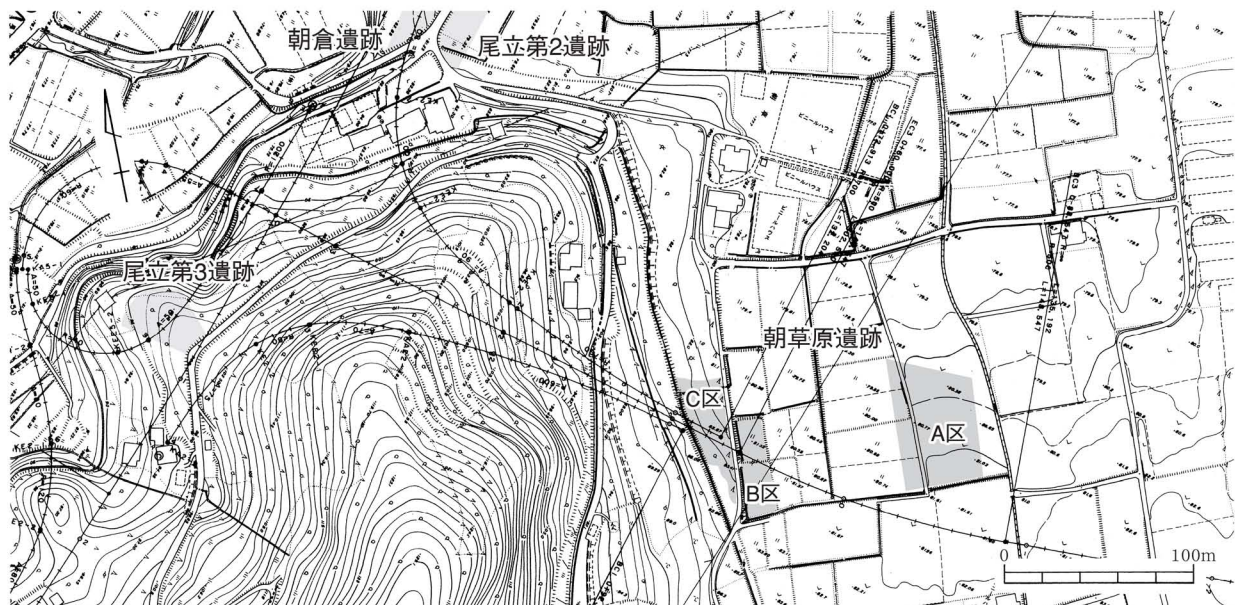
A 区では、無文土器片が主に出土した。そのうち、調査区の北東側の ML1 上部相当 (V 層) から無文土器片が数点出土した。堅緻な薄手の赤褐色土器で、焼成も良好である。MB0 (IV 層) から出土した無文土器とは雰囲気と異なる。

遺構は検出されていない。

②縄文時代早期

A 区の MB0 (IV 層) から無文土器片が集中する箇所が 2 か所確認された。いずれも 1 個体分の土器片が散在し、近くに土坑もしくは焼土遺構を有している。遺物は MB0 (IV 層) から抉りの深い石鏃が 3 点出土した。

C 区では、集石遺構が 2 基検出された。1 基は掘り込みを持つが、もう 1 基は掘り込みを持たない。遺物は、MB0 (IV 層) を中心に同地点の下層からも、同一個体と思われる貝殻条痕文土器が出土した。



第9図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)



写真7 ML1上部(V層)の無文土器出土状況

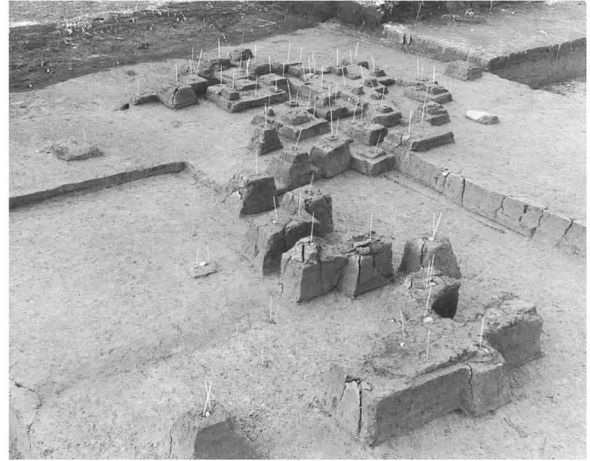


写真8 MB0(IV層)の無文土器出土状況

(3) 小結

B区において、MB2・MB3より下位(X層)の粘質の明褐色土(X I層)から礫群が検出された。C区より検出された礫群とは、規模や被熱状況に若干の差が見られるため、礫群の時期差を検討する上で手がかりとなる資料となろう。また、隣接する朝倉遺跡からもMB2相当の層から礫群が検出されている。今後双方の共通点、相違点を見出し検討することによって、都農町のATより下位の旧石器時代の様相を明らかにできるかも知れない。

本遺跡は遺構、遺物の密度が薄く、おおまかな分析しかできない。A区ではML1下部相当(VI層)、ML1上部相当(V層)、MB0(IV層)から後期旧石器時代～縄文時代早期の遺物が出土している。出土する土器は無文土器のみである。また、集石遺構や礫群は全く検出されなかった。

B区は、調査区の中央に大きな段を持ち、北側と南側に分かれる。北側は、表土下はすぐにATとMB2・MB3が混在する層(IX・X層)から始まっていたが、そこから礫群2基が検出された。表土直下のため、非常に不安定ではあるが、検出された礫群は不純な土を含むことはなく、暗褐色土層から検出されている。

C区は、MB0(IV層)から集石遺構2基と貝殻条痕土器が検出されている。このように、A区・B区・C区とそれぞれその遺跡の特徴と呼べるべきものが若干異なる遺跡である。

表10 基本層序

I	表土
II	クロボク
III	K-Ah (アカホヤ火山灰層)
IV	MB0 (黒色土)
V	ML1 上部 (黒褐色土)
VI	ML1 下部 (褐色土)
VII	Kr-Kb を含む層
VIII	ML2 (AT 2次堆積)
IX	AT
X	MB2・MB3 (暗褐色土)
X I	明褐色土層
X II	明黄褐色礫層

それはさらに、出土した縄文土器を見ても述べることができる。C区からは南九州で多く出土する貝殻条痕土器が出土しているが、A区ではML1上部相当(V層)、MB0(IV層)共に無文土器のみが出土した。特にML1上部相当(V層)より出土した赤褐色で薄手の無文土器は北部九州の影響も考えるべき遺物と思われる。

宮崎県内で北部に位置する都農町は、南九州と北部九州の中間地として交差的な役割を担っていたのではないだろうか。そのため、様々な様相の土器が流入し、受け入れられてきたものと考えられる。

(文責 井上美奈子)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、名貫川北側の大師山の中腹から裾にかけて舌状に広がる傾斜地に所在する。標高は約 95 m から 100 m を測る。標高約 15 m 下の北東に朝倉遺跡を望める。

(2) 調査の概要

本遺跡は傾斜地であるため、土層の堆積状況も薄く決して良好ではなかった。概ね ML1 下部相当 (II 層) の下層から後期旧石器時代の遺構・遺物、同じく ML1 下部相当 (II 層) の上層から縄文時代の遺構・遺物が見受けられる。しかし、遺跡が傾斜地に立地し、土層の混在が激しいため分層することは不可能であった。

①後期旧石器時代

ML1 下部相当 (II 層) の下層から礫群 11 基が検出されている。いずれも掘り込みを持たない。礫群の規模は、直径 1 m 以下である。他に北側端部に向かって流れるように焼礫が散在している。遺物は、剥片、石核、ナイフ形石器、敲石、角錐状石器、剥片尖頭器、細石刃核など約 250 点を数える。チャー

トの石材も多く含まれている。

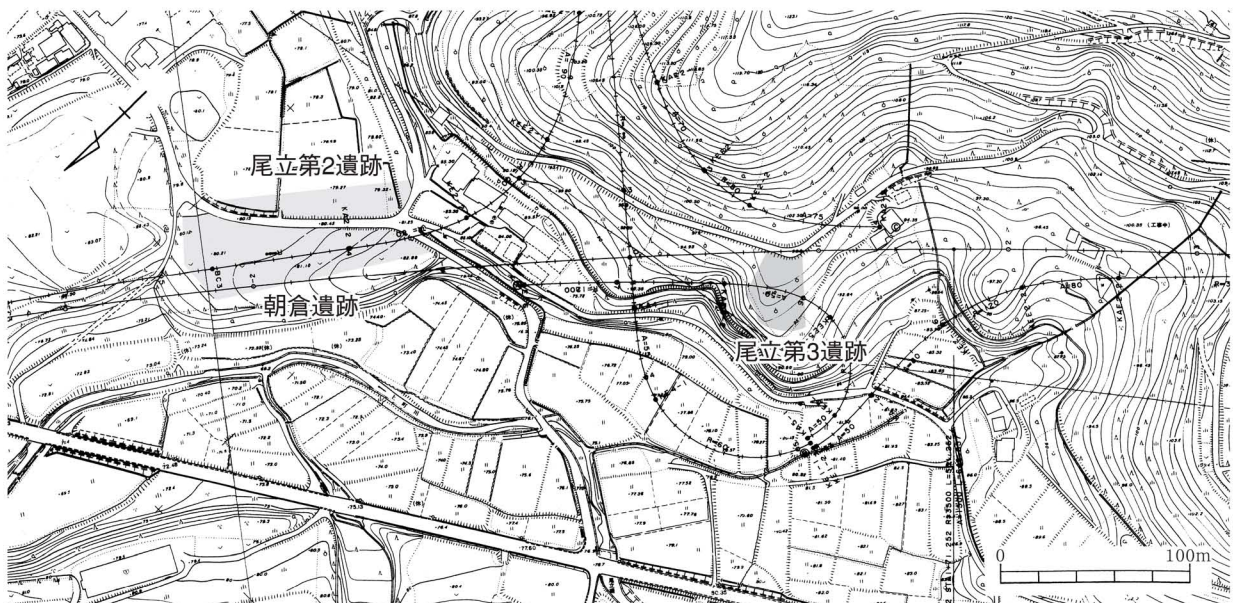
②縄文時代早期

縄文時代の遺構・遺物は少なく、集石遺構 1 基 (SI11)、石鏃 2 点、黒曜石の碎片 1 点のみである。SI11 は ML1 下部相当 (II 層) の中の上層から検出されており、掘り込みを持つ。付近から黒曜石の碎片が出土している。石鏃はいずれも無茎で抉りは浅い。草創期から早期の石鏃と考えられる。

(3) 小 結

本遺跡の北東部、標高約 80 m のところに朝倉遺跡が隣接している。広い台地上に立地する朝倉遺跡では、ML1 下部や AT 直上から直径 1 ~ 3 m 程度の大型の礫群が検出されている。本遺跡は朝倉遺跡を望む山の中腹の舌状に広がる尾根の先端部に位置する。朝倉遺跡に比べ、検出された礫群は直径 1 m 以下と小規模であった。出土遺物や層と対比させ同時代と見られるにもかかわらず、検出される礫群の規模に大きな差異が見られるのは特筆すべき点であろう。

遺跡の環境も高低差が 5 m 程ある傾斜地である。このように、全く異なった立地条件の中にも、礫群 11 基と遺物が 250 点余り出土している。本遺跡は、旧石器時代の人々が台地上だけでなく、山の尾根筋のような傾斜地も生活の場として選択していたことを明らかにしてくれている。(文責 井上美奈子)



第10図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

(1) 遺跡の立地

名貫川左岸の朝倉遺跡、尾立第3遺跡と同じ丘陵上の標高 135m～120mの鞍部に位置する。原地形は後世の造成により大幅に改変されている。

(2) 調査の概要

本遺跡では土層堆積状況が一様ではなく、調査区全体にわたって面的に堆積する層は存在しない。

調査区内の地形は斜面地で、かつ起伏にとみ、窪地、湧水などもあり、AT や K-Ah 等の二次堆積土が各所にみられ、東九州自動車道都農町域基本層序とは対応しない層も形成されている。

①後期旧石器時代

現在、礫群 38 基と土坑 1 基が検出されている。遺物は細石刃核、ナイフ形石器、台形石器、角錐状石器、剥片尖頭器等が出土している。

遺物群は、AT より上位の包含層中では遺物密度は高いものの、数型式のナイフ形石器や細石刃期の遺物が同一層（又は、同一レベル）内から混在して出土している状況であった。基部加工された剥片石器の中では台形石器が主体的にみられる。

細石刃核には船野型、畦原型、黒曜石を素材とした残核があり、それぞれの石材に対応した細石刃が出土している。

また、AT が良好に残存する調査区中央部平坦面では、AT 直下にナイフ形石器を含む文化層の存在が認められた。礫群 3 基と石器ブロック 3 箇所以上が検出され、石器ブロックでは白色系の石材と黒色系の石材とが使用されている。

②縄文時代早期

集石遺構 2 基と焼土を含む土坑 1 基が確認された。遺物は、塞ノ神式土器の破片が数点出土した以外、全て石器で剥片類が主体となり石鏃が少数ある。

(3) 小結

遺構や遺物の検出状況から、本遺跡では AT 降灰以後、ローム層が流水作用等の要因で影響をうける時期があり、地形によって再堆積層ができる箇所と良好に残存する箇所が存在したといえる。

その後、再堆積層や本来の堆積層上面に遺構が形成されるというサイクルが繰り返され、遺物や遺構の出土層位に不整合が生じている。

つまり本遺跡では、同時期の遺構であっても異なる層で検出される可能性が高く、その際、伴出遺物も層位的安定性を保っていないので、遺物が時期決定の主要因とはならない。

そのため、多数検出された後期旧石器時代に属する礫群の所属時期を把握する上で支障となっている。

このように、現段階では出土層位から遺構の時期を決定するのが困難な状況であるが、自然科学分析の援用等により、時期変遷の大要をつかむことが可能になると考えている。（文責 日高優子）



第11図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000) (立野第5遺跡・立野第2遺跡)

10 たての 立野第2遺跡

(1) 遺跡の立地

名貫川左岸の段丘崖沿いに位置する。標高 116m の台地の端部に位置し、調査区より南側は地形変換の著しい傾斜地となる。現在は、広域農道によって分断されているが、かつては立野第5遺跡と同じ丘陵上に位置していたものと考えられる。

(2) 調査の概要

調査にあたっては、ML1 上部 (Ⅲ・Ⅳ層)、ML1 下部 (Ⅴ) 層については調査区全面を調査し、それより下位の層はトレンチ調査とした。

調査の結果、Ⅲ・Ⅳ層から縄文時代早期、Ⅳ、Ⅴ層から後期旧石器時代の遺構と遺物が確認された。

①後期旧石器時代

Ⅴ層中から礫群 1 基と石器ブロックが検出された。石核、剥片類が出土しているが、製品は確認していない。石材は流紋岩、ホルンフェルスが主体となる中に尾鈴山酸性岩が少量混じる。トレンチ調査箇所では、広域農道側の調査区壁面の MB2 (Ⅷ層) より剥片 1 点と赤化礫 1 点が出土した。

②縄文時代早期

Ⅳ層上面にて散礫が検出され、散礫を除去すると、合計 15 基の集石遺構が確認された。散礫は広域農道側と調査区北西側に広がっている。

また、集石遺構は、本来の遺構検出面の形態をおさえきれていない可能性があるが、現在のところ 3 種類程度に分類される。

遺物はⅢ・Ⅳ層中より縄文土器、打製石鏃、磨石、剥片類等が出土している。縄文土器は無文土器と別府原式等の貝殻文系土器があり、無文土器が貝殻文系土器より上位で出土している。

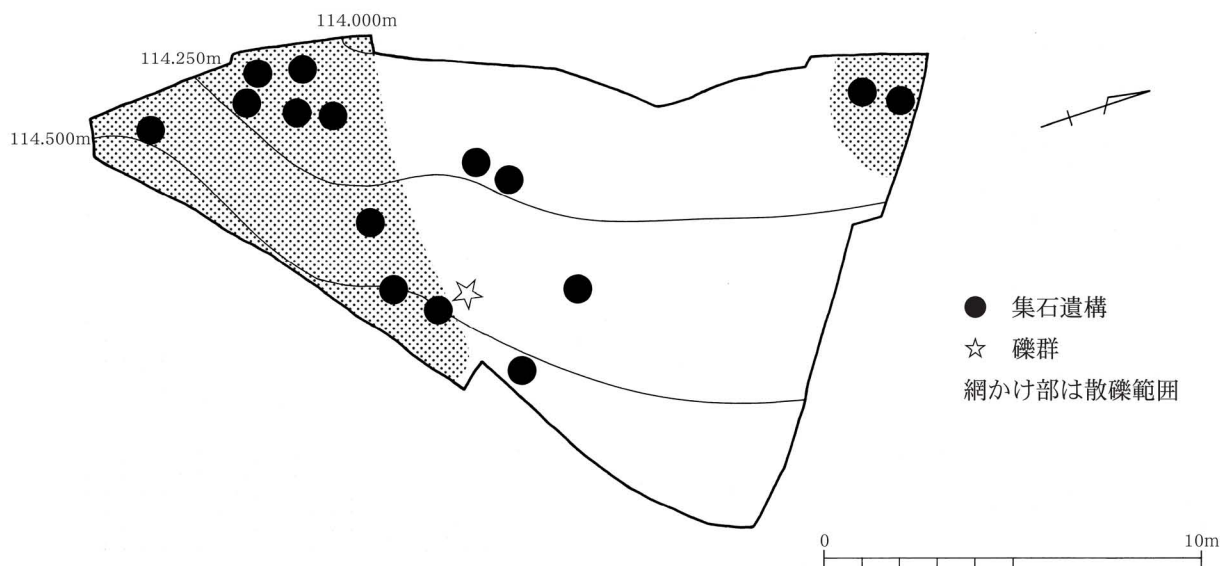
石鏃や剥片に使用される石材は、チャートが最も多く、ホルンフェルスや姫島産黒曜石もみられる。

(3) 小結

本遺跡で確認された縄文時代早期土器の出土状況は特筆される成果である。即ち無文土器の層位的・時期的位置づけを考える上で重要な資料となりうる可能性が高いと考えられる。

なお、調査区の広域農道側における縄文時代早期の散礫と後期旧石器時代の剥片等の存在から、遺跡は本来、広域農道側にも広がっていたと考えられる。

(文責 日高優子)



第12図 遺構分布図 (S=1/200)

はちまん 14 八幡第2遺跡

(1) 遺跡の立地

川南町と都農町の町境を東流する名貫川右岸の河岸段丘の2段目、標高は100mに位置する。

南には川南町の北西部に広く広がる唐瀬原台地があり、台地との比高差は20mである。

(2) 調査の概要

調査区は、町道を境に北からA-1区、A-2区、B区と設定した。A-1区は、農地利用のための削平等があり、K-Ahの残存部分は少なかった。一方、A-2区は部分的な攪乱のみであった。そしてB区では、中央にビニールや礫の埋められた大きな攪乱があった。

①縄文時代草創期

B区の南端で集石遺構1基が検出された。SI1はVI層褐色土の中部から検出された。規模は0.7~0.8mで掘り込みを持たない。構成礫は尾鈴山酸性岩類で、被熱を受け、赤化していた。埋土中から遺物の出土はなく、わずかな炭化物のみであった。周辺から隆帯文土器などの土器が少量出土した。炭化物は自然科学分析委託している。

②弥生時代後期

竪穴住居跡がA-1区で3軒、A-2区で6軒検

出された。住居は5m前後の方形を基調としたプランの住居である。そのうちA-2区で検出された1軒は三方に張り出しを持ち、張り出し部分はやや高くなっている。規模は7m前後で他に比べ、大型である。支柱穴は2本のものとは4本ものがあり、やや大型の住居跡に4本柱のものが多い。また、検出された住居跡の半数で多量の炭化材や焼土が検出されている。これらは焼失住居と考えられる。竪穴住居内からは、弥生土器(甕・壺・高坏等)や石器(石包丁・磨石・磨製石鏃等)が出土している。

③時期不明

B区で8条の溝状遺構が検出された。南北方向に3条、東西方向に5条走る。幅は0.5~1m、深さは0.1~0.5mである。埋土中から土器片が少量出土しているが、時期の特定できるものではない。

(3) 小結

A区で検出された竪穴住居跡は、出土した土器から弥生時代後期と考えられる。今後、住居跡内から出土した土器を検討し、集落の構成をみていきたい。

B区の集石遺構は、同層位で隆帯文土器が出土している。出土した土器は少量であり、その帰属時期が草創期に属するものか断定できない。今後、隆帯文土器の特徴と炭化物の自然科学分析の結果を合わせた検討が必要である。(文責 森本証明)



第13図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

(1) 遺跡の立地

尾鈴山系より派生する丘陵の裾部に立地する。標高は約 117mを測る。調査区内は開削・造成により段状を呈する畑地となっている。尾根筋側では削平が進み、表土直下に基盤層（粘土・礫層）があらわれる箇所が多い。一方、谷に面する側では客土が厚く盛られている。

(2) 調査の概要

上下2段に分けて調査を行い、調査区北側にあたる上段をA区（730m²）、調査区南側にあたる下段をB区（400m²）とした。A区では南東側、B区では南側で K-Ah（Ⅱ）層下層の黒褐色土（Ⅲ）層以下の各層が残存していた。

①後期旧石器時代の遺物

遺構は確認されなかった。暗褐色土（Ⅳ～Ⅵ）層からは剥片尖頭器・細石刃・ナイフ形石器が出土した。A T層（Ⅷ）下層の褐色土（Ⅸ）層ではA区の東側で多く出土し、それ以外の場所では遺物の出土

量は少なくなる。総数 93 点の剥片が出土したが、製品は見られない。剥片の石材はホルンフェルスが多い。B区のⅨ層からは遺物は出土しなかった。

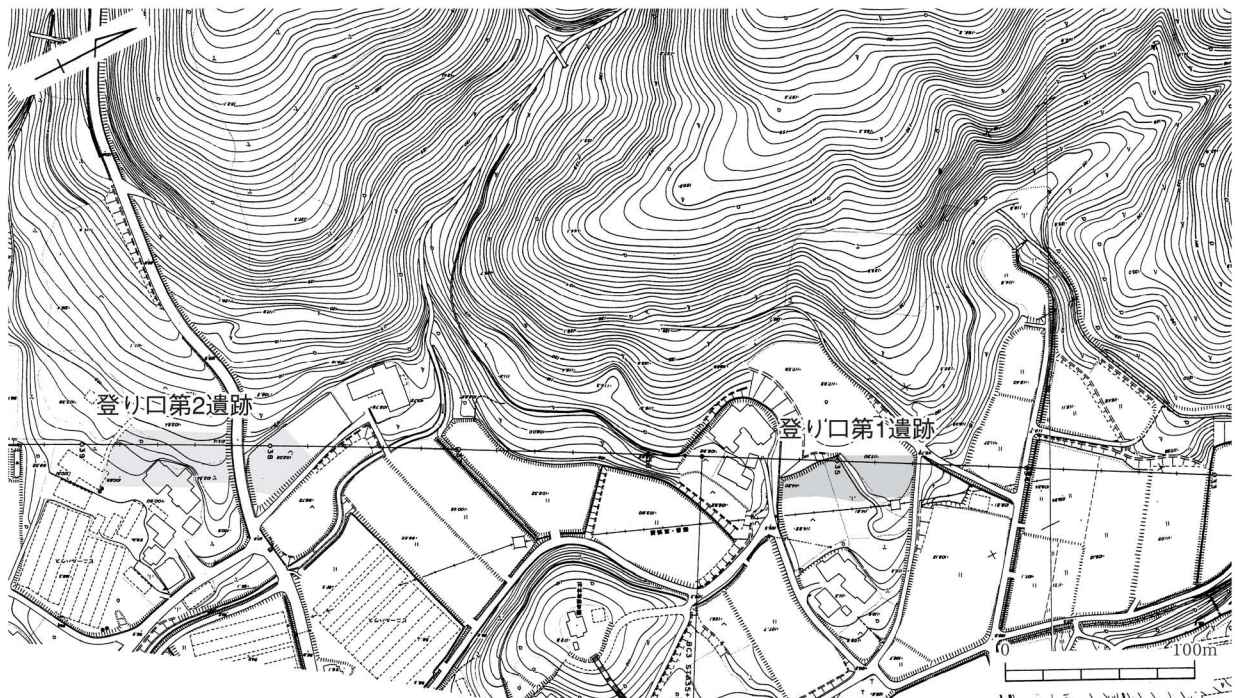
②縄文時代早期の遺物と遺構

遺構はⅣ～Ⅵ層で9基（A区8基、B区1基）の炉穴が検出された。A区では単独の炉穴が3基、切り合っているものが2群（2基と3基）確認された。プランが明瞭でなかったものに関しては、さらに掘り下げて検出を行ったことから、検出面に差が見られた。炉穴の埋土中から貝殻条痕文土器（中原Ⅱ式）が出土する場合もある。A区の8基は等高線にほぼ垂直に位置している。なお、集石遺構については未検出である。

遺物は、Ⅲ層から土器片・異形石器、Ⅳ層からは土器片（貝殻条痕文土器）・スクレイパー・石斧が出土している。Ⅴ層では土器片・石鏃が出土した。

(3) 小結

本遺跡では炉穴は検出されたが、集石遺構は未検出であった。多くの遺跡では両者とも確認される事例が多く、また散在する焼化礫が数点確認されたため、集石遺構は既に削平されてしまった可能性が高い。
（文責 白地 浩）



第14図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、登り口第1遺跡の南西に位置し、尾鈴山系より派生する丘陵の裾部（標高 102～105m）に立地する。調査区は西から東に傾斜する緩斜面であり、東側には平田川の支流が流れる。

(2) 調査の概要

調査区は町道を境に北区と南区に分けて調査した。北区は畑地や宅地造成に伴う地形の改変が著しく、遺構や良好な遺物包含層は残っていなかった。土層堆積状況を記録した後、調査を終了した。

南区は、昭和 48 年頃に草地造成が行われた牧草地であり、表土はこの造成による客土である。

基本層序は、表土（I層）、暗褐～褐色土（II層）、軟質黒褐色土（III層）、硬質黒褐色土（IV層）、暗褐色土（V層）、AT の二次堆積（VI層）、AT（VII層）、黄褐色土（VIII層）である。

①縄文時代

III層から早期の押型文土器と剥片が、また、IV層から剥片が出土したが、遺構は確認されなかった。

②古墳時代

IV層上面で遺構検出を行い、竪穴住居跡（SA1）1軒が検出された。5.2m×5.2mの方形を成し、床面から柱穴4基と焼土を含む土坑1基が検出された。遺物は、床面中央部から台石、壁帯溝から完形の小型丸底壺、埋土中から高坏の脚部や土師器の小片が多量に出土した。SA1の時期は小形丸底壺の年代から、古墳時代中期であると考えられる。なお、表土中からも細片化した土師器が多量に出土した。

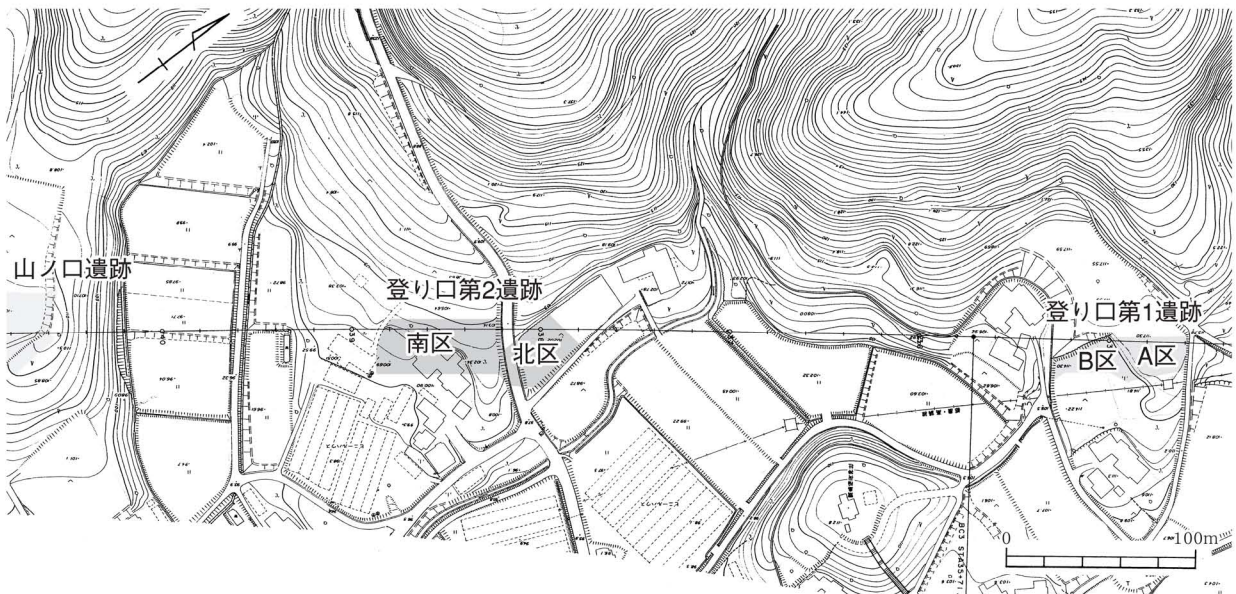
③その他

時期は不明であるが、溝2条と小穴60基が検出された。溝は、埋土がSA1とは異なるため、時期は異なると考えられる。小穴は、埋土中から遺物がほとんど出土せず、規則的な配列も見られないことから性格等は不明である。また、I・II層から中世の土師器杯や皿、備前系播鉢が出土し、近世後半～現代の陶磁器が表採された。

(3) 小結

検出された遺構は古墳時代の竪穴住居跡1軒のみであるが、草地造成により周辺の遺構は破壊された可能性が高い。本遺跡周辺の該期集落を考える上で、検出された住居跡は重要な資料となるであろう。

（文責 小川太志）



第15図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は川南町北西部、尾鈴山系に属する上面山(1,040m)の東麓に広がる唐瀬原段丘上の中央部に位置し、標高100m~110mを測る南側斜面に立地する。南側の斜面際は市納上第3遺跡と隣接し、さらに谷を隔てて反対側の東側斜面に市納上第4・5遺跡が立地する。また、調査区北側に接する町道を挟んだ東側斜面には市納上第1遺跡が立地する。

(2) 調査の概要

斜面地に立地しているため一様に堆積していないが、基本層序は上層から表土(I層)、黒色土(II層)、K-Ah二次堆積層(III層)、黒褐色土(IV層)、褐色土(Va層)、明褐色土(Vb層)、暗褐色土(VI層)、小礫混明褐色土(VII層)、礫層(VIII層)である。Vb層中よりAT火山灰がブロック状にみられる。

① 後期旧石器時代

礫の出土が散在して確認されたが、遺構は検出されていない。褐色土(Va層)上部より細石刃核が出土し、褐色土(Va層)中部から下部においてナ

イフ形石器・三稜尖頭器・剥片尖頭器・スクレイパーが出土している。また、AT下位とおもわれるVI層より剥片が集中する箇所がみられた。

② 縄文時代早期

黒褐色土(IV層)中にて遺構・遺物が確認されている。調査区西側にて散礫を検出したほか、集石遺構が約30基検出された。中には掘り込みや配石をもつものもみられる。遺物は貝殻条痕文土器・押型文土器・石鏃・石匙・磨石・敲石が出土している。

③ 縄文時代後期~弥生時代

K-Ah二次堆積層(III層)より確認されており、土器は縄文時代後期の土器が主体となる。石器は石鏃・石斧・石錘の他、尾鈴山酸性岩類製の剥片が数多く出土し、一部、石器製作ブロック状にまとまる箇所もみられる。この他、弥生時代後期の土器が少量確認された。

(3) 小結

当遺跡では、狭い調査面積ではあるが複数の遺物包含層が確認された。中でもK-Ah二次堆積層(III層)より尾鈴山酸性岩類製剥片が特徴的に出土しており、中には原石・石核とおもわれるものもみられる。今後、周辺遺跡の当該期における石材利用状況との比較・検討が必要である。(文責 立神勇志)



第16図 調査区と周辺地形(S=1/4,000)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、尾鈴山系の東麓にあり、切原川と篠原川にはさまれた台地（唐瀬原段丘面）の端部（標高約100m）に立地する。調査区の西側が谷になっており、全体的に西と南に向かって緩やかに下っている。

(2) 調査の概要

調査対象区は、遺跡の北側からA区・B区・C区とし、西側の谷に近い部分をD区と設定した。全体的に堆積状況は良好であるが、現代の耕作により、A区・B区の一部でK-Ah（Ⅱ層）までが、C区の一部でML1（Ⅳ層）までが削平されている。また、C区南部はAT（Ⅷ層）以下の堆積が不安定になっている。

調査はB区から開始し、その終了後C区・D区・A区と調査している。B区・C区では、ML3（Ⅹ層）まで掘り下げを行い、縄文時代早期、後期旧石器時代の遺構・遺物を検出した。

①後期旧石器時代

現在、B区・C区のKr-Kbを含む層（Ⅴ層）とMB2・MB3の掘削を終えている。

MB3（Ⅸb層）は、B区で剥片が1点検出されたのみで、遺構は検出されていない。

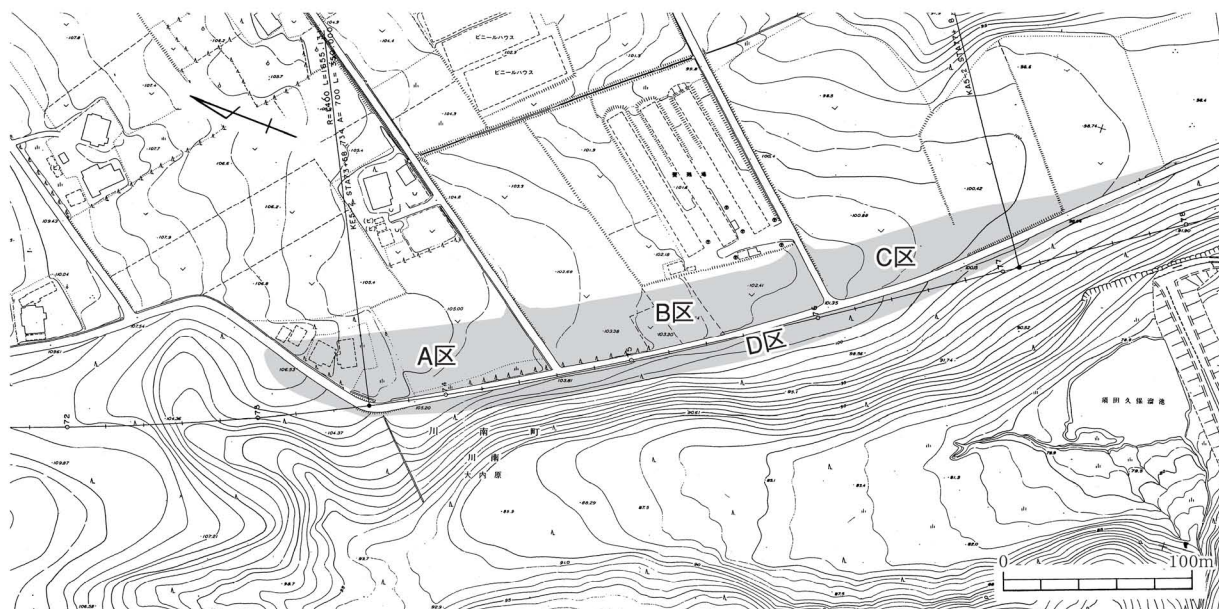
MB2（Ⅸa層）は、遺構・遺物ともに検出されていない。

Kr-Kbを含む層（Ⅴ層）の下部では、礫群4基を検出し、角錐状石器、ナイフ形石器、細石刃、敲石、石核、剥片が出土した。C区では、角錐状石器と剥片を中心とした、石器ブロックが検出されている。

②縄文時代早期

MB0（Ⅲ層）の下部及びML1（Ⅳ層）上面から、遺構・遺物が検出された。

遺構では、集石遺構、炉穴が検出された。集石遺構は、B区に3基、C区に2基、D区に6基、A区に現在16基の合計27基検出されている。構成礫は、ほとんどが尾鈴山酸性岩類で赤化、破砕が著しい。A区のSI12の周囲には、散礫が直径約10mの範囲で円形に取り巻いている。他の集石遺構に散礫は見られない。B区のSI2は、約60cmの掘り込みを持ち、底から直径約2cmの炭化材が検出されている。D区のSI8は、直径が約2m50cmにもなる。炉穴は、B区で1基のみ検出されている。遺物は、全体



第17図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

で約 3,000 点が出土している。そのうち土器は、山形・楕円押型文、貝殻条痕文、貝殻刺突文、無文のものが出土している。A区では、SI21・22に伴い、貝殻刺突文土器が出土した。

石器は、石鏃、石斧、スクレイパー、敲石、細石刃、石核、細石刃核、剥片、碎片が出土し、A区・B区には、碎片の集中する箇所が見られる。またB区の石鏃は、碎片の集中する箇所とは離れた場所から、他の遺物を伴わず単独で出土するものが多い。

(3) 小結

本遺跡では、後期旧石器時代及び縄文時代早期の遺構・遺物を確認した。

特に集石遺構は、A区・D区に集中しており、そこが生活の中心となった場所であったと考えられる。また、A区・B区に見られる碎片の集中箇所は、石鏃などの石器製作の場であった可能性が考えられる。そのことを明らかにするために、碎片を細かく観察していくことが必要となる。

今後は、本遺跡の南北に位置する中ノ迫第1・第3遺跡と、遺構・遺物の比較を行い、中ノ迫第2遺跡における当時の場の機能を明らかにしていくこととする。
(文責 佐竹智光)



写真9 SI8

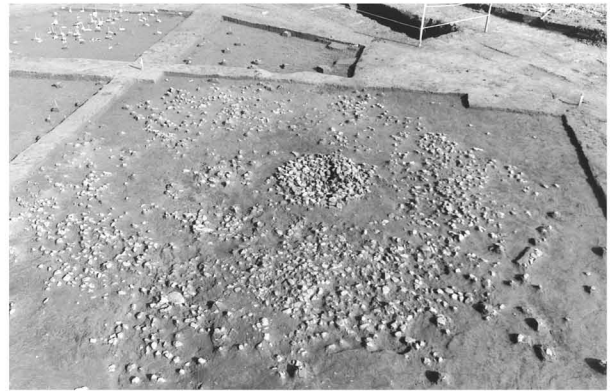
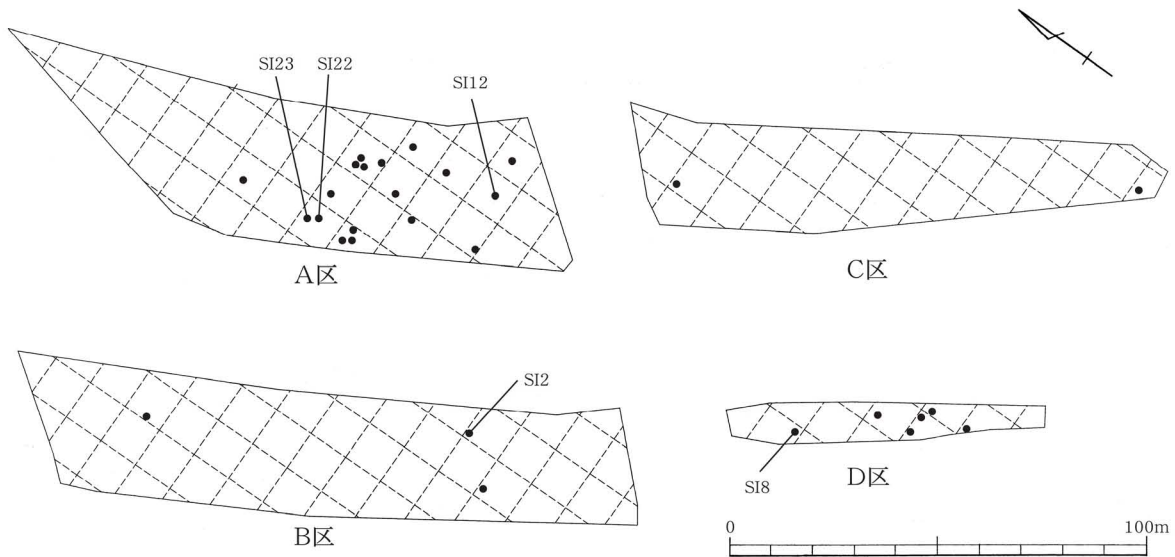


写真10 SI12と散礫



第18図 集石遺構分布図 (S=1/1,800)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、川南町北西部にある尾鈴山系東麓より派生する唐瀬原台地の南側（標高90m前後）に位置し、台地の南北には切原川と篠原川が東流している。

調査区より北東には中ノ迫第2遺跡が立地し、比高差は約10m前後を測る。

(2) 調査の概要

今年度は、昨年度に引き続き後期旧石器時代および縄文時代早期の調査を実施した。

昨年度における調査成果として、B区で後期旧石器時代の礫群と石核・剥片が数点確認された。

なお、昨年度概要報告では、その出土層位をMB1と記載したが、Kr-Kbを含む褐色土（VI層）と修正しておく。

また、縄文時代早期の集石遺構29基、土坑6基がMB0・ML1（IV・V層）より検出され、貝殻条痕文土器・押型文土器・打製石鏃・局部磨製石斧・打製石斧・剥片等も出土した。

①後期旧石器時代

Kr-Kbを含む褐色土（VI層）より礫群4基、MB2・3（IX層）より1基を確認した。

遺物は、橙色粘質土（Xa層）から打製石斧、VI層で

ナイフ形石器・石核・剥片、ML2（VII層）より剥片、V層下層中より細石刃等が出土した。

②縄文時代早期

A区・B区のIV層・V層から集石遺構4基と土坑6基、炉穴1基と切り合いの著しい炉穴群4群が検出された。また遺物の集中区も確認されている。

炉穴は、A区に2群、B区に1基と2群が分布する。それらの検出層位は、VI層であったが本来はIV層ないしV層より掘削されていたと考えられる。

さらにA区に炉穴の埋土中より、ほぼ1個体分の深鉢である貝殻条痕文土器片が出土した。

縄文時代早期に属する遺物は、貝殻条痕文土器・打製石鏃・台石・磨石・敲石等が挙げられる。特に貝殻条痕文土器については、施文や器形等から単独型式に限定される可能性が高い。

(3) 小結

本遺跡のXa層より後期旧石器時代の打製石斧が出土した。都農町朝倉遺跡でも、同層に相当する層から局部磨製石斧が出土している。県内での出土例は未だ少なく、稀少な資料として注目できる。

本年度は、新たに炉穴の存在が確認された。IV層・V層から検出された集石遺構と石斧類の製作も、こうした単独土器型式の中で営まれたと考えられる。

今後、遺跡の性格を解明する上で、3者の総合的観点からの検討が必要である。（文責 渡辺美幸）



第19図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、十文字扇状地の扇端部付近に位置する。国光原段丘面と、唐瀬原段丘面に挟まれた低地であり、標高約 60mを測る。国光原段丘面との間には、平田川の支流である小河川が流れ、調査区はその氾濫原より一段小高い地点にある。耕地整理以前は、周辺に湧水点が点在していたという。

(2) 調査の概要

本遺跡は、便宜上調査区南側をA区、北側をB区として、調査を実施した。調査区内には谷部分のみとめられ、平坦面ではAT面まで掘削を行い、谷部分では遺構検出を行った後、トレンチを設定し、遺物の有無を確認した。その結果、以下の時期の遺構・遺物が確認された。なお、基本層序は表 11 による。

① 後期旧石器時代

後期旧石器時代では、VII-a層～II b層にて遺物・遺構が確認されている。出土層位と出土遺物から、I～IV期の段階を設定することができる。

I期は、VII-a層出土のナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器を中心とした石器群である。

II期はIV-a層～V層上面出土のナイフ形石器、基部の挟りが明瞭でない剥片尖頭器、横長の剥片で構

成される石器群である。

III期・IV期の遺物はII b層～III層より混在した状況で出土しており、III期を小型のナイフ形石器群、IV期を細石刃・細石刃核を中心とした石器群と位置づけた。また、礫群は、

VII層下、IV～V層、III層下面で検出されており、I～III期に対応するものと考えている。さらにはI期において、縦長剥片、微細な調整剥片を伴っており、石器製作が行われていた可能性が高い。

その他、III層上面で土坑群とピット群が検出されている。土坑は、中央に空白地帯をはさみ東西に分かれて分布している。一方ピット群は、A・B区に入る微地形の中で、谷部分にて検出しており、双方は分布域を違えている。土坑の平面形態は不整形なものが多く、断面形態は、底部の一部がピット状に深くなり、壁面には、掘削痕を彷彿させる、縦方向に伸びる筋状、または斑点状の痕跡を確認している。

② 縄文時代草創期～早期

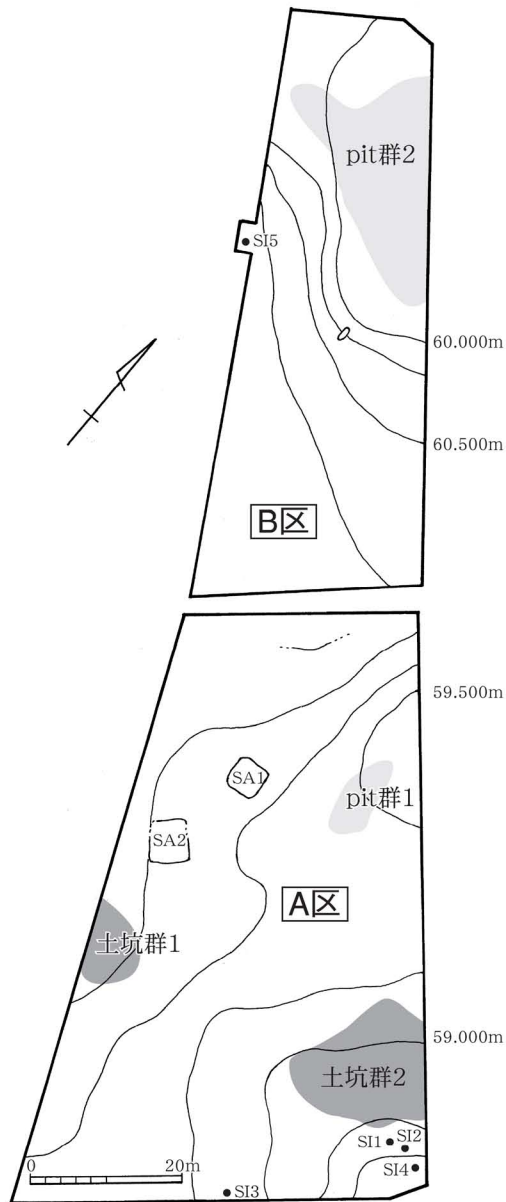
A区B区とも、II b層において集石遺構5基(A区4基、B区1基)が検出されている。A区では、調査区の縁辺部すなわち氾濫原への落ち際付近に位置している。SI 3には隆帯文土器が、SI 4には無文土器が近接して出土している。

表11 基本層序

表 土	
I層	K-Ah
II層-a	黒褐色土層 (MBO相当)
-b	暗褐色土層 (MLI相当)
III層	褐色土層
IV層-a	褐色土層 (Kr-Kbを少量含む)
-b	暗褐色土層 (Kr-Kbを含む)
-c	褐色土層
V層-a	暗褐色土層 (黒褐色ブロックを含む)
-b	暗褐色土層
VI層	明褐色土層 (AT2次堆積層)
VII層-a	明褐色土層 (ATブロックを少量含む)
-b	AT
礫 層	



第20図 調査区と周辺地形 (S=1/8,000)



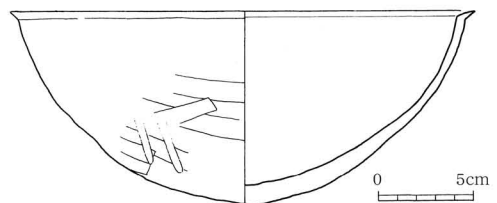
第21図 遺構分布図 (S=1/1,000)



写真11 礫群と石器 (IVa層)



写真12 SA1 炭化材出土状況



第22図 SA2出土土器 (S=1/4)

③弥生時代後期後葉～終末期

I層において、方形の竪穴住居跡（焼失住居）が2軒検出された。SA1は4m×4mで支柱は2本である。炭化材が良好な状態で出土しており、茅と思われる植物性繊維質も確認された。その他の出土遺物は僅かである。SA2は5m×5mで支柱は4本である。ベッド状遺構がほぼ全周巡り、土坑が南壁際に3基、西壁際に1基検出されている。住居の壁際に少量の炭化材、中央北側部分に焼土が三日月状に残るなど、SA1とは様相が異なる。出土遺物は、甕・壺・鉢等SA1と対照的に多く、中でも鉢は口縁部が短く屈曲し、周辺遺跡では例を見ないものである。

(3) 小結

以上、後期旧石器時代・縄文時代・弥生時代と幅広い時期の遺構・遺物が確認できた。後期旧石器時代においてはAT上面にて4段階にわたる石器群が、縄文時代では、隆帯文土器、無文土器とそれに伴う可能性の高い集石遺構が検出された。縄文時代初頭の集石遺構は県内でも例が少なく、貴重な資料であると言える。また弥生時代では、近接する前ノ田村上第1遺跡・赤坂遺跡と同様、焼失住居が検出されており、その詳細な時期的併行関係を今後検討していく必要がある。（文責 嶋田史子）

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、平田川と切原川に挟まれた国光原台地の南部に位置する。調査区は、北西から南東に向かって下りの斜面になっており、標高は64m～74mである。湯牟田遺跡は本遺跡の南隣に位置する。

(2) 調査の概要

斜面の途中に、調査区を横切る農道があり、これを挟んで北側をA区、南側をB区と設定した。

昨年度の調査は、A区を中心に実施し、縄文時代早期・弥生時代後期後半・中世の各遺構が検出された。本年度の調査は、B区で行われ、K-Ah (IV層)、黒褐色土(V層)、褐色土(VI層)、暗褐色土(VII層)、褐色粘質土(VIII層)、AT(IX層)、黒褐色粘質土(X)、暗褐色粘質土(X I)の各層で精査を実施した。

①後期旧石器時代

B区南西部のVIII層上部で、礫群1基を検出した。遺物は、X I層で剥片・台形石器・礫器・石核、X層で剥片・敲石・石斧、VII～VIII層で角錐状石器・剥片、V～VI層で細石刃・細石刃核・ナイフ形石器・台形石器・剥片・石核が出土した。

②縄文時代草創期～早期

B区V層～VII層においては、縄文時代草創期から早期にかけての遺構が検出された。

VI層上面よりやや下の部分では、B区南東部を中心に散礫が広がっている。散礫中に36基の集石遺構が点在しており、そのうち18基は、掘り込みを有する。また配石を有するものは、1基あるのみで、その他の35基に配石は存在しない。この層位では押型文土器などが出土した。

V～VI層最下部では、18基の集石遺構が検出され、18基すべてが掘り込みを有していた。また、そのうちの6基から配石が検出された。この層位では爪形文を有する隆帯文土器などが出土した。

V層で検出した集石遺構は、合計で54基になるが、構成礫は、ほとんどの集石遺構で尾鈴山酸性岩類が一番多くの比重を占めている。その他の構成礫は砂岩とホルンフェルスなどがある。

一方、VI層上面で3基、VII層上面で38基、合計で41基の炉穴が検出された。形態は、基本的に長楕円形を呈しているが、ブリッジは全て遺存していなかった。

VI層上面で検出した炉穴は、単独のもの1基、切り合いにより群をなすもの1群である。

遺物は無文土器片が出土した。



第23図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

VII層上面で検出した炉穴は、単独で1基、群をなすものが5群である。

遺物は、貝殻条痕文土器片と剥片が出土した。

炉穴の炉部は各層総計41基の内、35基で検出されており、大多数の炉穴では、炉部は斜面の上方に配置されている。

またB区では、VI層上面で18基の土坑が検出された。埋土はいずれも柔らかく、検出面からの深さは、0.1m～0.45mである。

遺物は、縄文施文の土器片・山形押型文土器片・爪形文を有する隆帯文土器片が出土した。

③中世

B区で、新たに溝状遺構10条が検出された。また、A区の調査で検出されていた溝状遺構2条のうちの1条は、B区に延伸していることが確認された。この溝状遺構のA区の北端からB区の南端までの長さは50mをこえる。

B区における溝状遺構の幅は、検出面で0.65m～0.9m、検出面からの深さは0.1m～0.4mを測る。埋土中より、東播系の播鉢片、へら切り底の土師皿がわずかに出土したのみである。

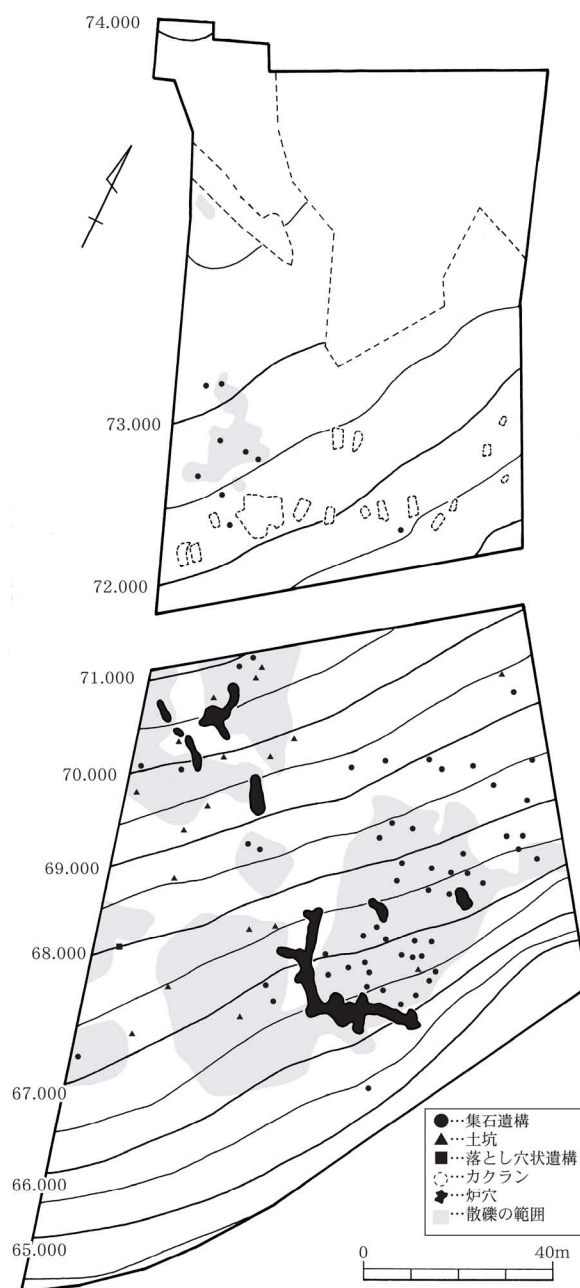
④時期不明

B区VII層で1基の土坑が検出された。検出面からの深さは1.05mもあり、埋土もかなり固い。遺物は出土しなかった。陥し穴状遺構の可能性が高い。

(3) 小結

昨年度の国光原遺跡A区の調査では弥生時代の遺構が主に検出されたが、今年度のB区の調査では、弥生時代の遺構は全く検出されず、縄文時代草創期～早期の遺構が多く検出され、遺物も多数出土した。なかでもA区では検出できなかった炉穴がB区で41基も検出されたことは注目できる。傾斜の緩やかなA区では、集石遺構の数は10基に満たなかったが、傾斜の急なB区では50基以上を検出しており、炉穴や集石遺構の分布のあり方が、A区とB区では対称的な傾向を読みとることができる。

(文責 安藤正純)



第24図 縄文時代遺構分布図 (S=1/800)



写真13 炉穴 (SP1) 完掘状況

(1) 遺跡の立地

小丸川左岸の国光原台地末端にあたる平坦な海岸段丘縁辺部に立地しており、標高は約 57m である。調査区の東・西・南側は急傾斜の崖面となっており、台地は南に小さく突出したような形状を呈している。段丘下の沖積平野部との比高差は約 45m である。崖下を巡るように尾花川が流れ、さらに南には小丸川支流の切原川が南東方向へ流れている。また遺跡の北部は谷地形になっており溜池が存在しているため、当時の水源であった可能性も考えられる。

現在一次調査と二次調査とに分かれて調査しているため、分割して報告する。

(2) 一次調査の概要

前年度からの継続調査であるが、調査の都合上調査区を拡張することになった(第25図)。

継続調査区においては、K-Ah 二次堆積層(IVa層)及びK-Ah 一次堆積層(IVb層)上面で古墳時代初頭～前期を中心とする時期の集落跡を、また暗

褐色 ML1 (VIa 層) 上面で縄文時代早期の集石遺構を確認した。現在は古墳時代の調査は終了し、縄文時代早期の調査を行っている。

拡張区ではクロボク相当層(III層)にて弥生時代中期～古墳時代前期を中心とする集落跡を検出したが、遺構誤認の恐れがあったため最終的にIVb層上面で遺構検出を行った。縄文時代の遺構に関しては現在のところ確認されていない。(文責 大野義人)

①縄文時代早期

遺構は集石遺構を 100 基以上確認しており、台地の南端に向かって密度が高くなる。また、一定の範囲に集中する傾向にあり、複数の集石遺構が切り合う状況も見られる。この他、継続調査区北部で石器ブロックを 1 箇所検出した。

遺物はVIa層より縄文土器(押型土器・変形燃糸土器・貝殻条痕土器)、石器(打製石鏃・打製石斧・尖頭器・スクレイパー・磨石・敲石・台石・石皿・異形石器)が出土した。

②縄文時代前期～晩期

現在のところ該期の遺構は検出されていないが、攪乱土や後世の遺構埋土中から土器片(轟式土器・曾畑式土器・黒色磨研土器・孔列土器)、石器(打製石斧)、玉類(獣形勾玉転用品)が出土した。

(文責 福田 聡)



第25図 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

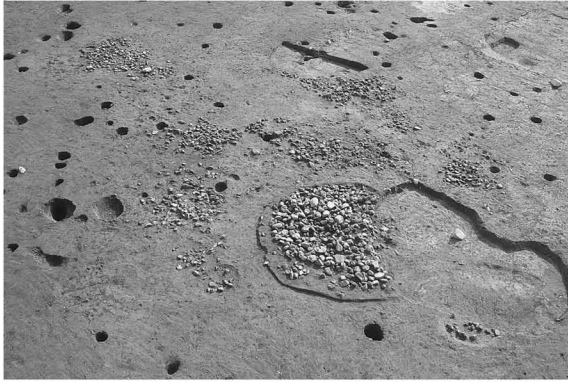


写真14 集石遺構検出状況（一次調査）



写真15 土器出土状況（一次調査）

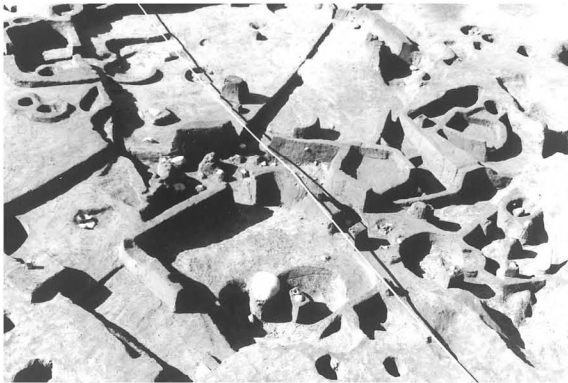


写真16 遺構群完掘状況（一次調査）

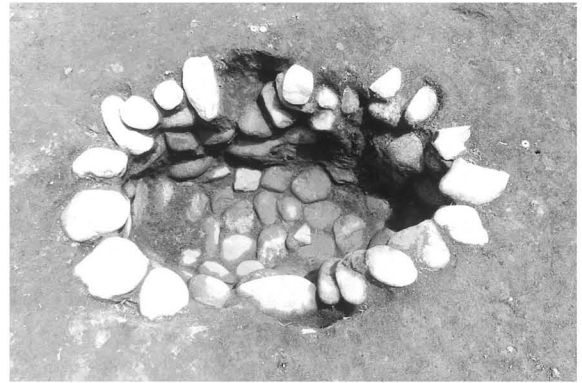


写真17 石組遺構検出状況（一次調査）

③弥生時代中期～終末

拡張区において該当時期の遺構が確認された。遺構は竪穴住居跡（約10軒）、土坑、ピット群が確認されているが、現在も精査中であり今後増加する可能性は高い。遺構群はやはり多くが切り合っているが継続調査区ほどの密度ではなく、弥生時代中期の円形竪穴住居跡、後期後葉～終末にかけての方形間仕切り住居跡や張り出しを有する住居跡などが検出され、集落の時期幅を考える必要がある。

出土遺物は弥生土器、石器（磨製石鏃・石包丁・砥石・磨石・台石・石錘）、鉄器（鉄鏃・刀子・鉋）などである。

④古墳時代初頭～前期

尾花A遺跡全体における集落の最盛期と考えられる時期である。竪穴住居跡約100軒、土坑約130基、溝状遺構2条、ピット群を検出した。掘立柱建物跡も数棟検出されているが、時期は明らかでない。ただし住居跡を切るものが多いため、古墳時代前期以降のものである可能性が高い。遺構の切り合いは激しく、特に台地縁辺部に集中している。

出土遺物は土師器、石器（磨製石鏃・打製石斧・石包丁・磨石・砥石・台石・石錘）、鉄器（鉄鏃・袋状鉄斧・刀子・鉋）などである。

⑤古墳時代後期

ごく少数であるが、古墳時代後期の遺構・遺物も確認されている。遺構については土器埋設炉を有する竪穴住居跡1軒、馬埋葬土坑と思われる遺構1基が検出された。

遺物は竪穴住居跡より土師器（甕）、土製品（土錘）、土坑より鉄器（轡）が出土した。

⑥古代～中世

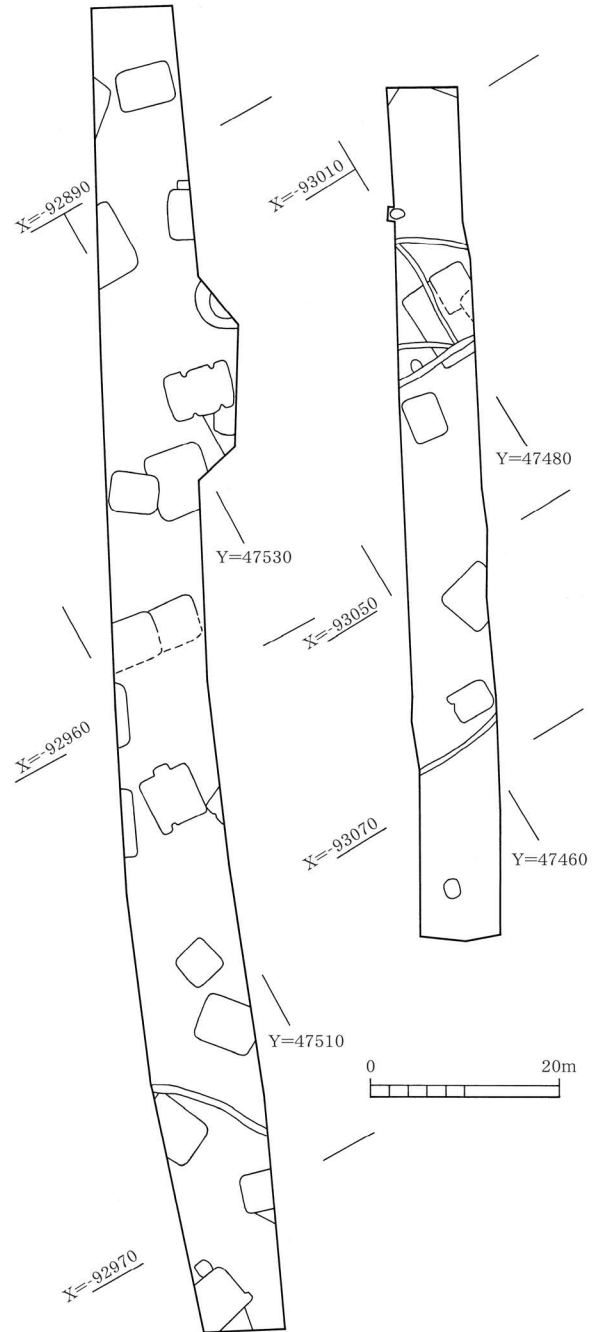
古代～中世にかけての遺構として溝状遺構6条、中世の遺構として石組遺構を2基検出した。溝状遺構に関しては硬化層が何層か確認されたため、道路状遺構の可能性が考えられる。

出土遺物は土師器（甕・坏・皿）、須恵器（坏蓋・甕）、陶磁器（龍泉窯系青磁・東播系須恵器）、銅銭、土製品（土錘）、その他（炉壁片・鉄滓）などが出土している。

（文責 大野義人）



第26図 尾花A遺跡（一次調査）遺構分布図（S=1/500）



第27図 尾花A遺跡（二次調査）遺構分布図（S=1/800）



写真18 竪穴居住跡完掘状況（一次調査）



写真19 集石遺構検出状況(二次調査)



写真20 堅穴住居跡完掘状況(二次調査)

(2) 二次調査の概要

K-Ah で弥生時代終末～古墳時代の集落、中世のピット群が検出された。また、K-Ah および MB0 (V層) で縄文時代の遺構・遺物が確認された。

また、倒木痕内の明褐色土 ML1 (VIa 層) に旧石器時代の遺物が含まれていたため、その存在が想定できる。

①縄文時代早期

MB0 (V層) にて集石遺構3基が検出された。集石遺構に伴う土器の出土は確認されないが、MB0 (V層) からは貝殻条痕文土器が出土している。

②縄文時代晩期

楕円形プランをもつ土坑を1基確認した。埋土中からは、突帯文土器や石斧・石錘・磨石等が投棄されたかの状態で出土した。

③弥生時代中期

長方形のプランをもつ堅穴住居跡2軒が検出された。このうち1軒では、床面で大型の甕と敲石や磨石等の石器が出土した。

一方、円形プランをもつ周溝状遺構が1基検出された。埋土中は土器片が多く出土している。

④弥生時代終末～古墳時代前期

遺構は堅穴住居跡24軒が確認されている。そのうち、方形の間仕切り住居跡が4軒確認された。多くの堅穴住居跡は、切り合い関係は少なく、単独で検出された。主な遺物は弥生土器、土師器、石包丁、石錘、磨石等があげられる。

⑤中世

溝状遺構5条、土坑1基、ピット群が検出された。土坑はやや長い方形を呈しており、埋土中から白磁片が出土した。また、多数のピットが検出されていることから、掘立柱建物跡が予想される。

(文責 天野玄普)

(3) 小結

尾花A遺跡では、縄文時代早期から中世にかけて幅広い時期の遺構・遺物が確認できたが、集落として最も繁栄したのは古墳時代初頭～前期にかけてであったと考えられる。遺構同士が多く切り合っているにもかかわらず土器型式の差はほとんどなく、おそらく布留1～2式併行期のごく限られた時期に栄えた集落であったと考えられる。ただし、調査区が北に移るにつれ弥生時代中期～終末の住居跡が検出されるようになることから、分布域を違えて古い時期の集落があったことが推定できる。

また、土器埋設炉を持つ住居跡が存在することから後続する時期の集落の存在も考慮すべきである。そしてまだ要検討であるが、馬埋葬土坑と思われる遺構の存在は看過できない。馬埋葬土坑は古墳とともに検出される傾向が強いため、近辺に古墳があった可能性をも示唆するものである。

縄文時代早期においても、一次調査区にて集石遺構が多数検出されているため二次調査区でも検出される可能性は高い。また、二次調査区において旧石器時代のものと思われる遺物がわずかながら確認されているため、さらなる精査が必要である。

(文責 大野義人)